

愛知県東海市

中ノ池遺跡群発掘調査報告書

付載1 高ノ御前遺跡第3地点試掘調査報告
付載2 岩屋口古墳調査報告

1982

東海市教育委員会

愛知県東海市

中ノ池遺跡群発掘調査報告書

付載 1 高ノ御前遺跡第 3 地点試掘調査報告
付載 2 岩屋口古墳調査報告

1982

東海市教育委員会

序 言

最近の都市化の進展にともない、土地開発が進む一方の今日ほど、埋蔵文化財の重要性が認識されるべき時代はありません。

昭和54年11月に着工された中ノ池区画整理事業は、高横須賀町中ノ池地内の44haを対象区域として現在も着々と進められています。

中ノ池遺跡群発掘調査は、昭和55年1月から2月にかけての17日間にわたり、のべ約400人の作業員を動員して実施されました。その結果、弥生時代後期の住居跡が7件確認され遺物も多数出土しました。

この地は、標高約30mの高地にあり、岩屋口古墳、柳ヶ坪遺跡が間近に望める位置にあります。本遺跡は、高所性という点からみて、付近で行われていた稲作の収穫物を盗難から守るために建てられた見張番小屋の性格をもった集落跡だと推定されております。

調査は、区画整理事業の進捗とにらみ合わせて行われたため、工事の中断、あるいは高所という本遺跡の性格上、資材の運搬困難、加えて、2月という寒い時期の作業等々で、関係各位には大変であったろうと思われまゝです。しかしながら、各方面の誠意ある御協力により無事調査を終了することができ、ここに報告書を発刊できることができましたことは望外の喜びであるとともに、調査に携わって頂きました皆様方に衷心より謝意を申し上げます。そして、本書が埋蔵文化財の研究の一助となり、更には、その保護活動の手掛りとなることを期待してやみません。

なお、本書には既に調査済の、高ノ御前遺跡第3地点試掘調査報告及び岩屋口古墳調査報告を付載として掲載いたしました。

昭和57年3月

東海市教育委員会

教育長 築波善夫

例 言

1 本書は、昭和55年1月と2月に東海市教育委員会が発掘を実施した愛知県東海市高横須賀町に所在する中ノ池遺跡群の調査報告である。

併せて、高ノ御前遺跡の第3地点の試掘調査報告と、岩屋口古墳の石室実測調査の報告を収録した。

2 中ノ池遺跡は、中ノ池を取り巻く丘陵上5ヶ所で遺物を採集し、それぞれ調査を実施し、併せて遺跡群としたものである。うちB地点とした丘陵上で、弥生時代後期の住居跡が発見された。

高ノ御前遺跡は、縄文時代の遺跡で、この時代の遺跡としては現在のところ東海市でまとまった唯一のものである。

岩屋口古墳は、知多半島で最も大きな規模の横穴式石室を持つ古墳である。

3 調査体制及び調査に御協力下さった方々は第2章第1節（中ノ池）、付載1の2（高ノ御前）、付載2の2（岩屋口）に記したとおりである。このほか市文化財調査委員や地元の各位の多大な御援助をいただいた。ここに厚く感謝の意を表したい。

4 本書の執筆は、全体の監修と第4章を杉崎章、その他を立松彰が担当し、付載1の縄文土器編年については磯部幸男、山下勝年両氏の教示を得た。

5 石材の同定は、伊藤新、中島福三両氏にお願いし、肉眼観察に依った。

6 写真図版中に付された番号は、実測図版の番号と一致する。

7 実測図の方位は磁北を示す。また等高線、断面図などに記されている数字は標高を表している。

8 本書に関する資料はすべて東海市立郷土資料館に収蔵されている。なお、付載1高ノ御前遺跡に掲載した表採資料は、山口克（名古屋市）、伴野敏幸（大府市）、久野謙太郎（東海市）各氏から寄贈を受けたものである。

目 次

第1章 遺跡の位置と周辺の遺跡	1
第1節 遺跡の位置と地形	1
第2節 周辺の遺跡	4
第2章 調査の経過	6
第1節 調査の経緯	6
第2節 調査の日記	6
第3章 各地点の調査	9
第1節 A・C・D・E・F地点の調査及び表採土器	9
1 A地点の調査	9
2 C地点の調査	10
3 D地点の調査	11
4 E地点表採遺物	12
5 F地点出土遺物	12
第2節 B地点の調査	14
1 遺構と遺物	14
2 まとめ	28
第4章 総 括	31
付載1 高ノ御前遺跡第3地点試掘調査報告	35
1 位 置	35
2 調査の経過	35
3 遺跡の状況	36
4 遺 物	38
5 ま と め	47
付載2 岩屋口古墳調査報告	49
1 古墳の位置	49
2 調査の経過	49
3 石室の調査	50
(1) 墳 丘	50
(2) 石室構造	50
(3) 遺物の出土状態	50
(4) 遺 物	52
4 ま と め	54

挿図目次

図1	中ノ池遺跡群付近の地質概念図	1
図2	中ノ池遺跡群位置図	2
図3	中ノ池遺跡群周辺の遺跡分布図	3
図4	A地点付近の地形図	9
図5	C地点付近の地形図	9
図6	C地点土壌実測図	10
図7	C地点出土遺物実測図	11
図8	D地点付近の地形図	11
図9	D地点出土遺物実測図	12
図10	E地点表採土器実測図	12
図11	F地点付近の地形図	12
図12	F地点表採土器実測図	13
図13	B地点遺構分布図	13
図14	1号竪穴・炉状遺構実測図	15
図15	1号竪穴出土土器実測図	16
図16	2号竪穴内土壌実測図	16
図17	2号竪穴実測図	17
図18	2号竪穴出土土器・石器実測図	18
図19	3号・4号竪穴出土土器実測図	19
図20	3号・4号竪穴実測図	20
図21	5号竪穴実測図	22
図22	5号竪穴出土土器実測図	22
図23	6号竪穴実測図	23
図24	6号竪穴出土土器・石器実測図	24
図25	7号竪穴実測図	25
図26	7号竪穴出土土器・石器実測図	26
図27	竪穴外出土遺物実測図	27
図28	条理制と古代遺跡分布図	34
図29	高ノ御前遺跡位置図	35
図30	高ノ御前遺跡第3地点調査区図	36
図31	高ノ御前遺跡第3地点A区平面図・断面図	37
図32	高ノ御前遺跡第3地点B区平面図・断面図	37
図33	高ノ御前遺跡第3地点・土器拓影1	39

図34	高ノ御前遺跡第3地点・土器拓影2	40
図35	高ノ御前遺跡第3地点・土器拓影3	41
図36	高ノ御前遺跡第3地点・土器実測図	43
図37	高ノ御前遺跡第3地点・石器実測図1	44
図38	高ノ御前遺跡第3地点・石器実測図2	45
図39	岩屋口古墳位置図	49
図40	岩屋口古墳石室実測図	51
図41	岩屋口古墳出土遺物実測図1	52
図42	岩屋口古墳出土遺物実測図2	53

表目次

表1	中ノ池遺跡群周辺の遺跡分布	4
表2	1号竪穴内ピット寸法	14
表3	2号竪穴内土壇寸法	18
表4	4号竪穴内ピット寸法	21
表5	7号竪穴内ピット寸法	26
表6	B地点竪穴の規模等一覧表	29

図版目次

- 図版1 中ノ池遺跡群C地点遠望・焼土壙
- 図版2 中ノ池遺跡群B地点遠望・1号竪穴
- 図版3 中ノ池遺跡群B地点2号竪穴
- 図版4 中ノ池遺跡群B地点2号竪穴内土壙
- 図版5 中ノ池遺跡群B地点3号竪穴・5号竪穴
- 図版6 中ノ池遺跡群B地点4号竪穴
- 図版7 中ノ池遺跡群B地点6号竪穴・7号竪穴
- 図版8 中ノ池遺跡群B地点1号竪穴～4号竪穴
- 図版9 中ノ池遺跡群B地点7号竪穴・B地点出土石器
- 図版10 中ノ池遺跡群B地点各竪穴出土土器
- 図版11 高ノ御前遺跡第3地点遠望・A区貝層
- 図版12 高ノ御前遺跡第3地点・土器1
- 図版13 高ノ御前遺跡第3地点・土器2
- 図版14 高ノ御前遺跡第3地点・土器3
- 図版15 高ノ御前遺跡第3地点・石器
- 図版16 高ノ御前遺跡第3地点・自然遺物
- 図版17 岩屋口古墳石室
- 図版18 岩屋口古墳出土遺物等
- 図版19 岩屋口古墳出土遺物

第1章 遺跡の位置と周辺の遺跡

第1節 遺跡の位置と地形 (図1・2、図版1・2・18)

中ノ池(なかのいけ)遺跡群は、愛知県(尾張国)東海市高横須賀町に所在する中ノ池をとりまく丘陵に立地する。

東海市は、知多半島北端の伊勢湾に面して位置し、主に海岸平地と知多丘陵の台地上に発達した人口約9万6千人のまちである。北は天白川を隔てて名古屋市、東は大府市、南東は知多郡東浦町、南西に海岸線をともにして知多市とそれぞれ接している。

中ノ池をめぐる丘陵は、名古屋鉄道河和線が起点の太田川駅を出て、次の高横須賀駅を過ぎてゆるやかにカーブするあたりの南にのびている。この丘陵の支谷に、溜池である中ノ池が水をたたえている。

遺跡付近の地形は、知多半島の骨格をなす知多丘陵にもとを発した支丘末端が、いくつも海岸近くまでのびてきている。この付近の海岸部は、半島内ではかなり広い沖積低地がひろがり平地部を形づくっている。この海岸平地には、海岸線に沿って3条の隆起砂堆列が横たわっており、砂堆上には縄文時代後期以後の遺跡が点在している。

なお、本遺跡群の各地点の所在地番は次のとおりである。

A地点 愛知県東海市高横須賀町山弥蔵32及び32第1

B地点 愛知県東海市高横須賀町藤塚31、32及び35

C地点 愛知県東海市高横須賀町御用木29、45、46、47及び48

D地点 愛知県東海市高横須賀町円場戸8

E地点 愛知県東海市高横須賀町池ノ脇地内

F地点 愛知県東海市高横須賀町藤塚地内

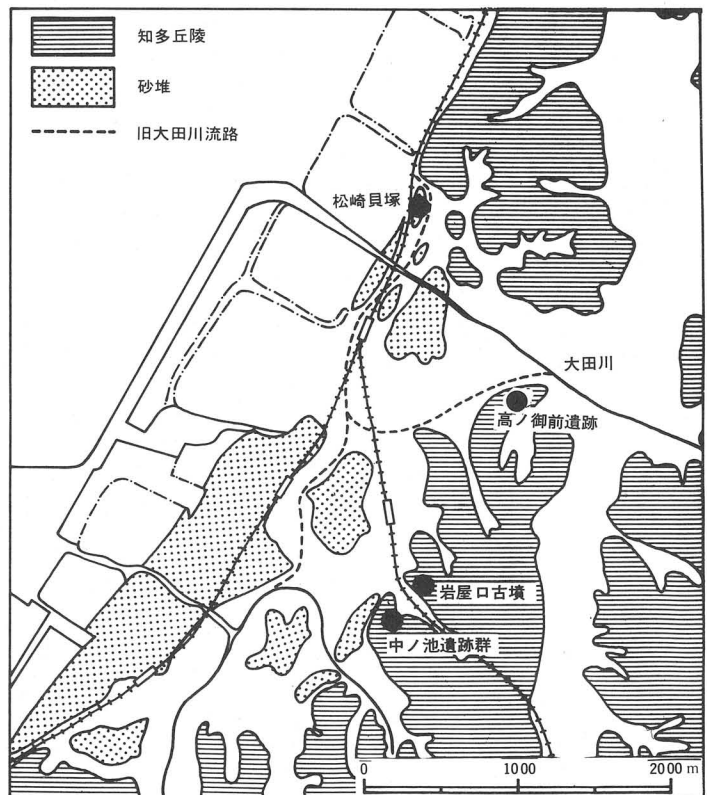


図1 中ノ池遺跡群付近の地質概念図



図2 中ノ池遺跡群位置図



図3 中ノ池遺跡群周辺の遺跡分布図

第2節 周辺の遺跡（図3）

中ノ池遺跡群の立地する丘陵の西方にひろがる海岸平地の砂堆列上に数多くの遺跡が分布する。周辺の遺跡を表にすると、次のようである。

表1 中ノ池遺跡群周辺の遺跡分布

註1 表の番号は図3中ノ池遺跡群周辺の遺跡分布図の番号と一致する。

註2 参考文献の数字は表末尾の参考文献目録の番号を示す。

番号	遺跡名	所在地	遺跡概要	時代	遺物	参考文献
1	まつざき 松崎貝塚	東海市大田町松崎	遺物包含地	古墳時代～ 平安時代	製塩土器、須恵器、 土師器、灰釉陶器	2、7、9、 13
2	おつか 王塚古墳	東海市大田町寺下	古墳(円墳、 滅失)	古墳時代後期	須恵器、直刀、管玉	6
3	しもはまた 下浜田遺跡	東海市大田町下浜田	遺物包含地	古墳時代～ 奈良時代	製塩土器	2
4	うしろ 後田遺跡	東海市大田町後田	遺物包含地	古墳時代	土師器	
5	あしはな 東畑遺跡	東海市大田町東畑	遺物散布地	弥生時代後期	弥生後期土器	
6	たかのこせん 高ノ御前遺跡	東海市大田町高ノ御前	遺物包含地	縄文時代前期～ 晩期	縄文前期～晩期土器	8
7	あしはな 前畑遺跡	東海市大田町前畑	遺物散布地	弥生時代後期	弥生後期土器	
8	おんげん 御亭遺跡	東海市高横須賀町御亭	遺物包含地	弥生時代後期	弥生後期土器	
9	えぼし 烏帽子遺跡	東海市高横須賀町烏帽子	遺物散布地	弥生時代中期	弥生中期土器	
10	おたがわ 太田川第3踏切貝塚	東海市高横須賀町北屋敷	遺物包含地	平安時代～ 江戸時代	灰釉陶器、近世陶磁器	14
11	いわた 岩屋口古墳	東海市高横須賀町岩屋口	古墳(円墳)	古墳時代後期	須恵器、刀子、土師器	6
12	みやにし 宮西遺跡	東海市横須賀町四ノ割	遺物散布地	古墳時代～	製塩土器	
13	おんげん 大門遺跡	東海市横須賀町二ノ割	遺物散布地	古墳時代～	製塩土器	
14	うらわし 漁脇遺跡 あしはな 浜脇遺跡	東海市養父町漁脇 東海市養父町浜脇	遺物散布地	古墳時代～	製塩土器	
15	しんかみどう 釈迦御堂遺跡	東海市養父町釈迦御堂	遺物散布地	古墳時代～	製塩土器	
16	釈迦御堂古墳	東海市養父町釈迦御堂	古墳(滅失)	古墳時代後期	組合せ式石棺	6
17	あしはな 妙乗院遺跡	東海市養父町里中	遺物包含地	古墳時代～	須恵器、土師器、山茶碗	12
18	しまのうち 島ノ内遺跡	東海市養父町島ノ内	遺物包含地	古墳時代～	須恵器、土師器、近世陶磁器	
19	むらやま 社山古窯址	東海市加木屋町雉子野	窯址	鎌倉時代	瓦類、山茶碗、小皿	5

番号	遺跡名	所在地	遺跡概要	時代	遺物	参考文献
20	柳ヶ坪遺跡	東海市高横須賀町柳ヶ坪	遺物包含地	縄文時代、弥生時代中期・後期、平安時代～江戸時代	縄文土器、弥生中期・後期土器	1、7
21	中ノ池遺跡群	東海市高横須賀町(中ノ池周辺)	遺物包含地	弥生時代後期～古墳時代	弥生後期土器、須恵器	
22	獅子懸遺跡	知多市八幡字獅子懸	遺物包含地	弥生時代中期	弥生中期土器	3
23	野崎遺跡	知多市八幡字野崎	遺物包含地	弥生時代中期	弥生中期土器	4
24	荒古遺跡 (1)八幡神社地点 (2)蔵池地点 (3)堀切地点 (4)西川向地点	知多市八幡字荒古後 " " 字蔵池 " " 字堀切 東海市養父町西川向	遺物包含地 " " "	弥生時代前期 弥生時代中期 弥生時代後期 弥生時代後期	弥生前期土器 弥生中期土器 弥生後期土器 弥生後期土器	11
25	大廻間遺跡	知多市新知字上大廻間	遺物包含地	縄文時代前期～後期、弥生時代中期・後期	縄文前期～後期土器 弥生中期・後期土器	10
26	法海寺遺跡	知多市八幡字平井	遺物包含地	弥生時代中期～古墳時代、奈良、平安、鎌倉、室町、江戸時代	弥生中期・後期土器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、瓦類	15
27	細見遺跡	知多市八幡字細見	遺物包含地	弥生時代前期・後期	弥生時代前期～後期土器	

参考文献目録

- 1 杉崎 章、1953：「愛知県知多郡横須賀町柳ヶ坪貝塚」。愛知県知多郡横須賀中学校。
- 2 杉崎 章、1956：知多半島における古代漁村集落の土器。古代学研究15・16合併号・20～25頁。
- 3 杉崎 章、1956：獅子懸遺跡。「知多郡八幡町史料第2集・八幡のむらのおいたち」。20～26頁。
- 4 杉崎 章、1956：野崎遺跡。参考文献3の10～11頁。
- 5 杉崎 章、榎崎彰一、田中 稔、久永春男、1956：社山古窯。横須賀町史別冊横須賀の遺跡。6～44頁。
- 6 横須賀町史編集委員会編、1970：「横須賀町史」、41～45頁。
- 7 杉崎 章、石川玉紀、磯部幸男、立松 宏、江原昭善、渡辺毅一、1971：「愛知県東海市柳ヶ坪遺跡」。東海市教育委員会。
- 8 杉崎 章、1971：付載第一東海市高御前遺跡。参考文献7の28～31頁。
- 9 杉崎 章、1971：付載第二東海市松崎貝塚。参考文献7の32～34頁。
- 10 杉崎 章、磯部幸男、山下勝年、森下雅彦、1975：「知多市新知大廻間遺跡・知多市文化財報告第13集」。知多市教育委員会。
- 11 杉崎 章、1975：付載第二荒古遺跡。参考文献10の20～22頁。
- 12 池田陸介、1976：妙乗院遺跡。東海市文化財調査委員報告書第3集。45～46頁。図版7～10。
- 13 杉崎 章、石川玉紀、磯部幸男、立松 彰、宮川芳照、山下勝年、1977：「愛知県東海市松崎貝塚発掘調査報告」。東海市教育委員会。
- 14 池田陸介、1979：太田川第3踏切貝塚の出土品。広報とうかいNo.246。7頁。東海市企画課。
- 15 杉崎 章、磯部幸男、片山正樹、宮川芳照、森下雅彦、山下勝年、山原紀子、1979：「知多市八幡法海寺遺跡・知多市文化財報告第15集」。知多市教育委員会。

第2章 調査の経過

第1節 調査の経緯

中ノ池遺跡群は、遺跡分布調査によって発見された。分布調査は、中ノ池周辺の区画整理事業が開始されて、山焼きが行なわれた後に実施された。その結果、土器散布池が2ヶ所、混貝土層のみられる地点が2ヶ所発見された。これらの地点を、便宜的にA～D地点とした。A～C地点は丘陵頂上にあり、D地点は丘陵の西麓に立地する。各地点の現状維持に関する協議を行なったのであるが、当該事業は丘陵の土砂を谷合に運んで、平坦地を造成するものであり、計画変更が不可能であることから、発掘調査を実施することになった。

調査は、事業計画上、まずC地点を行ない、続いてA・B・D地点を行なうことになった。調査は実働20日を要し、各方面の協力を得て終了することができた。

以下、調査関係者名を記しておく。所属は調査当時である。

事務局

築波善夫（東海市教育長）、早川政美（教育次長）、皆川英哉（社会教育課長）、吉田清孝（社会教育係長）、新海公博（社会教育課主事）

調査参加者

杉崎章（知多中学校校長・調査主任）、磯部幸男（奥田小学校校長）、山下勝年（武豊小学校教諭）、池田陸介、石川玉紀、堤文二、長谷川昭二（東海市文化財調査委員）、森下雅彦（横須賀中学校教諭）、加古兼敬、中島泉太郎（緑陽小学校教諭）、中野晴久（明治大学）、大竹弘之（同志社大学）、中村信幸（京都学園大学OB）、奥川弘成、権貞華、浅田巖、久野光一、小島之治、坂野俊哉、福井祥二（愛知学院大学）

富木島町、大田町、高横須賀町地区の方々25人、東海市役所職員

協力者

伊藤稔、加藤安信（愛知県教育委員会文化財課）、三井建設・磯部組建設共同企業体

整理参加者

奥川弘成

第2節 調査の日誌

昭和54年12月26日 中ノ池周辺土地区画整理事業計画区域内の遺跡分布調査を、市文化財調査委員と市教育委員会職員によって実施した。当該事業区域内は、雑木林の丘陵地であり、調査の困難さが予想されたが、この時点ですでに工事中道路が切り開かれ、山焼きも行なわれていたので、その跡を主として踏査した。

昭和55年1月19日 造成工事の近づいたC地点の調査を行なうため、発掘器材を現地へ運搬する。

1月22日 C地点の発掘を開始する。丘陵頂上全域の表土除去作業を行なう。その結果、土器片

のまとまって出土する地点1ヶ所と、炭化物の堆積した楕円形の土壌1ヶ所を検出した。

1月23日 土器片のまとまって出土した地点と、楕円形土壌の調査を行なう。それぞれの実測と写真撮影、遺物の取り上げを行ない、この地点の調査を終了する。

2月8日 A・B・D地点発掘調査の準備。各地点の調査区域の設定と除草作業を行なう。

2月9日 B地点にテントを設営し、発掘器材を搬入する。

2月10日 発掘調査開始。B地点に調査関係者が全員集まり、調査に関する諸説明を行なう。B地点の除草と表土はぎを行なう。工事用道路によって切り崩された断面に残る、炭化物と焼土のみられる落ち込みの広がりを中心に調査する。表土の厚さは10cm～30cmで、その下から土器片のまとまって出土する地点2ヶ所を検出した。

2月11日 作業班を2班にし、A地点の表土はぎを開始する。A地点は混貝土層の発見された地点であるが、遺物の出土は本日のところ全くなかった。B地点は落ち込みの範囲を調査し、プランの確認された1号竖穴（番号は検出した順に便宜的に付した）内の排土を始める。床面から高坏形土器2個が出土。この他、竖穴遺構3ヶ所を検出した。

分布調査の折、B地点南方の斜面（藤塚地内）において、白い色をした瓦の破片が出土したとの聞き込みを得ていたので、その付近にトレンチを入れたが何も発見されなかった。

2月12日 A・B地点の調査。A地点は丘陵頂上に2m×2m～19mのトレンチを5ヶ所設定し調査した。遺物としては貝類の他、瀬戸物の磁器片が数点出土したのみである。混貝土層は幅約20cm、厚さ3cm～5cm、長さ約3mの帯状をなしたものを1列検出した。B地点は、遺構検出のため調査区の拡張を行なう。表土をはいだ面に竖穴のプランが見い出される。

2月13日 A地点の実測と写真撮影を行ない調査を終了する。B地点は、竖穴のプラン検出と調査区の拡張を行なう。地山面と遺構内の土質がよく似ており、何度も散水して僅かな差を調べ、プランの検出をすすめる。

2月14日 B地点の調査。2号～4号竖穴のうち、プランの全容を検出した2号と4号竖穴の排土を行なう。1号竖穴の残存する遺構の全容が明らかとなり、セクション用土手を取り除く。

2月15日 B地点の調査。調査区の北側で竖穴を検出する。2号・4号竖穴の排土。床面近くに炭化物が広がっている。被覆土中から器表面の剝離した脆弱な小土器片が出土する。

2月16日 作業班を再び2班に分け、D地点の調査を開始する。B地点において5号竖穴のプランを検出する。調査区の東側にある土器群の実測と写真撮影を行なう。D地点は混貝土層の発見された地点で、貝層の分布する個所を中心に4m×6mのトレンチを設定し調査を行なう。

2月17日 B・D地点の調査。B地点で6号・7号竖穴を検出。2号～6号竖穴の排土。D地点の混貝土層は径約1m、厚さ約20cmで、中から山茶碗片が出土。周囲から須恵器、土師器系中世土器、近世の陶磁器片が混在して出土した。実測と写真撮影を行ない、この地点の調査を終了する。

2月18日 B地点の調査。2号竖穴のセクション用土手を取り除く。4号～7号竖穴の排土。

2月19日 昨夜来の降雪のため作業中止。

2月20日 積雪の影響により調査区に入ることができず、作業中止。

2月21日 B地点の調査。4号～7号竪穴の排土。6号竪穴の床面から壺形土器が出土した。

2月22日 B地点の調査。2号竪穴内の土壌調査。4号竪穴のセクション用土手を取り除く。7号竪穴床面から台付壺形土器、鉢形土器が出土した。

2月23日 B地点の調査。1号～5号竪穴の床面等を精査し、柱穴の有無を調べる。6号・7号竪穴の排土。

2月24日 B地点の調査。1号～5号竪穴の清掃を行なう。1号竪穴の東にある炉状遺構を調査する。6号・7号竪穴の排土。

2月25日 B地点の調査。6号・7号竪穴のセクション用土手を取り除く。調査区南側の遺構の実測を開始する。

2月26日 B地点の遺構等の実測を行なう。調査期間中に、新たに土器の採集された地点（E地点）の踏査を行なう。付近一帯からは何も発見されなかった。

2月27日 B地点の遺構の実測を行なう。1号・3号・5号竪穴実測完了。

2月28日 B地点の遺構の実測を行なう。2号・4号・6号・7号竪穴の実測完了。写真撮影を行なう。本日にて全作業を完了する。

後日、造成の進捗に伴いB地点及びB地点から南西にのびる丘陵の南側斜面から土器を採集したが、削り取られた土砂中からのもので、調査はできなかった。土器の出土したとみられる場所をF地点とした。

第3章 各地点の調査

第1節 A・C・D・E・F地点の調査及び表採土器

1 A地点の調査(図4)

A地点は、分布調査時に混貝土層の発見されたところで、標高28m前後のおおむね平坦な丘陵頂上に立地する。頂上中程に、肥溜めの大きな甕が埋けられており、往時耕作が行なわれていたとみられる。

混貝土層の分布する場所を中心に、頂上全域を網羅できるようにトレンチを5ヶ所設定して、調査を行なった。トレンチは幅2mで長さが2m~19mと異なる。

調査の結果、本地点は近世以降に耕作の始められた畑地と判断された。混貝土層は、幅20cm、厚さ3cm~5cm、長さ約3mの帯状を呈し、丘陵頂上面の南端中程に、南北を軸にしてのびていた。混貝土層内から近世の磁器及び陶製の土錘が出土した。貝は、ハマグリ、カキなどで、いずれも小さなものが混在していた。この混貝土層は、おそらく耕作時の水ぬきか、肥料として運ばれたものと考えられる。

本地点の出土遺物は、上記のほか現代の磁器が数点出土したのみである。



図4 A地点付近の地形図



図5 C地点付近の地形図

2 C地点の調査（図5、図版1）

C地点は、分布調査時に土器片の散布していたところで、標高37m前後の丘陵頂上に立地する。頂上はゆるやかに盛り上がり、中程に肥溜めの大きな甕が埋けられており、往時耕作が行なわれていたとみられる。頂上部の周囲は、段々畑のように段状に切り開かれている。

頂上全域の表土除去作業を行なった結果、土器群1ヶ所と楕円形の土壌1ヶ所を検出した。

(1) 遺構（図6）

炭化物の堆積した楕円形の焼土壌を、丘陵頂部の南東端近くで検出した。この土壌の規模は長径4m、短径1.4m、底面はおおむね平坦で、深さは15cm前後を測る。ほぼ全面に炭化物が堆積し、土壁や底面が焼けて赤くなっている。壁は全体にめぐらず、南側の一部が切れている。底面から土器群内の土器と同じ時期に属すとみられる弥生土器が出土している。土壌の築かれた時期は、伴出した土器の使用された頃と考えられる。

(2) 遺物（図7）

弥生土器は、丘陵頂上北東寄りの平坦面に0.8m×1.2mの範囲の地層から出土した（土器群としたもの）。そこから出土した土器は、1・2・4・5である。3・6は分布調査時に丘陵斜面から採集した。土器はすべて小片で、器表面が剥落し遺存状態の不良なものが多かった。

1は甕形土器で口縁部外面に細い刷毛目の調整痕がみられる。2は高環形土器で脚部に4個の

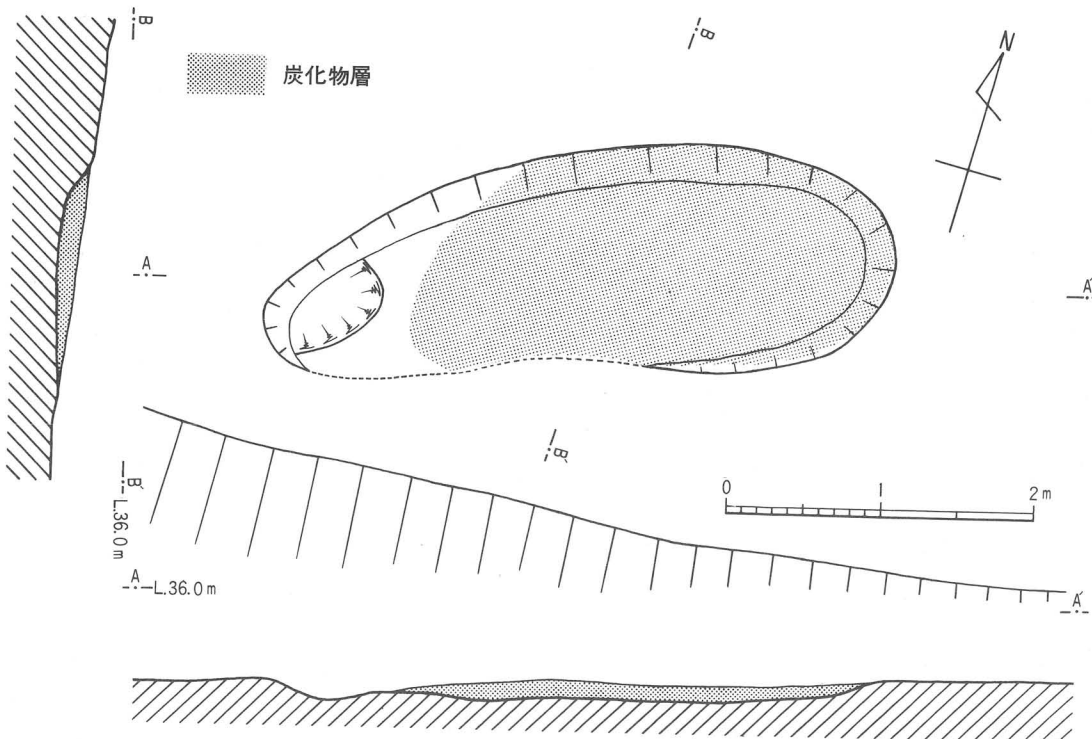


図6 C地点土壌実測図

円孔をうがつ。4・5は壺形土器で、4は底部が上げ底である。3は台付壺形土器の脚台とみられる。6は器壁の厚い天目茶碗である。

(3) まとめ

本地点の土器群から出土した弥生土器の型式を明らかにできないが、おおむね弥生時代後期のものに類似する。

往時の耕作による影響もあって、全体の様相を明確にできなかった。調査した限りでは、住居址はなく、短い期間に一時的に生活が営まれた場所のようである。土壌の性格についてもはっきりしないが、ここで焚かれた火は割合が大かなりなものであったことは想像できる。

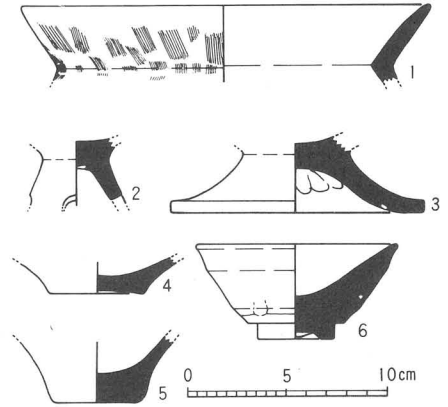


図7 C地点出土遺物実測図

3 D地点の調査 (図8)

D地点は、分布調査時に混貝土層の発見されたところである。中ノ池の南に南北にのびる支丘の先端西麓に立地する。標高は9 m前後である。付近一帯は、水田の跡をとどめている。

混貝土層の分布する場所を中心にして4 m×6 mのトレンチを設けて調査を行なった。その結果、混貝土層のひろがり、径約1 m、厚さ20cm~30cmであった。貝はハマグリ、シオフキが主体で、カキ、アカニシを混入していた。いずれも小さなものばかりである。そこから、鎌倉時代に属する、いわゆる行基焼(盗器系中世陶器)の山茶碗が出土した。この他、トレンチ内から須恵器、山茶碗、土師器系中世土器の内耳付土鍋、近世の陶磁器が混在して出土した。

(1) 遺物 (図9)

2は弥生時代に属すとみられる高環形土器で、脚台に4個の円孔をうがつ。1は土師器の甕形土器とみられる。3~8は須恵器。高環(3)は脚台のみであるが、脚端に段を有する。環(4~8)は、蓋受けの立ち上がりの大き目のものである。底部はへら削りで、底面に円と直線を組み合わせた刻線を描いたもの(4・8)もある。9は山茶碗の底部で、糸切されている。

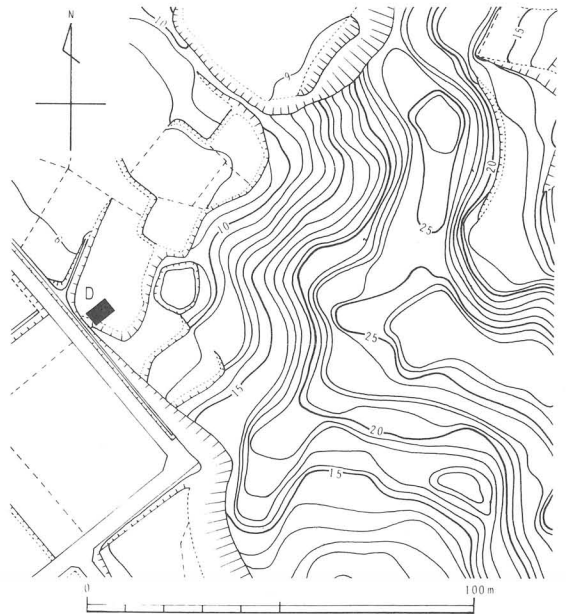


図8 D地点付近の地形図

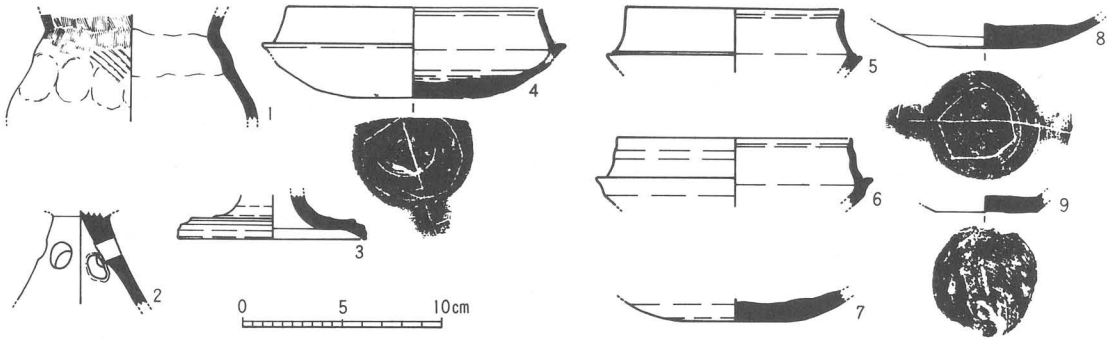
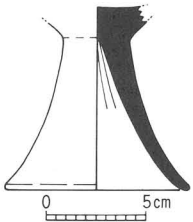


図9 D地点出土遺物実測図



(2) まとめ

本地点の混貝土層は、水田の肥料として運ばれたとみられる。
 出土した土器類のうち、須恵器の破片には割合大きなものもあり、二次的に運ばれたのではなく、この須恵器が用いられた時期には、本地点に何らかの生活基盤があったと思われる。

図10 E地点表採土器

実測図

4 E地点表採遺物 (図10)

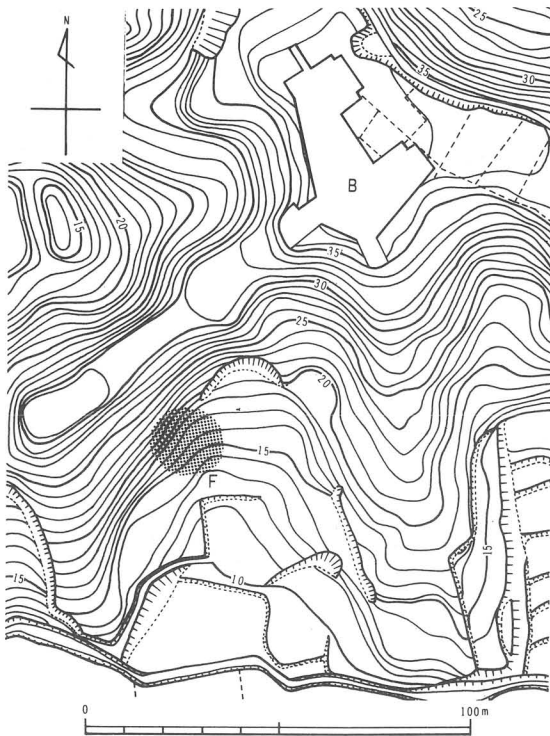


図11 F地点付近の地形図

B地点調査中に、中ノ池取水路のコンクリートでできた水路内から、弥生時代後期に属すとみられる高环形土器の脚台を採集した。調査時に周囲一帯の踏査を行ったが、該当する遺跡は発見されなかった。この土器の器表面は内外面とも磨耗している。

5 F地点出土遺物 (図11)

F地点は、B地点から南西にのびる支丘の南側斜面下方、標高15mあたりに立地する。調査後に、市文化財調査委員池田陸介氏の手によって、造成工事の進捗に伴い切り崩された土砂の中から土器が採集された地点である。遺物 (図12)

1は甕形土器、2・3は高环形土器。4～8は台付甕形土器の脚台である。いずれも小片で土器型式を明らかにできないが、おおむね弥生時代後期の欠山式に伴うものに類似する特徴を有している。

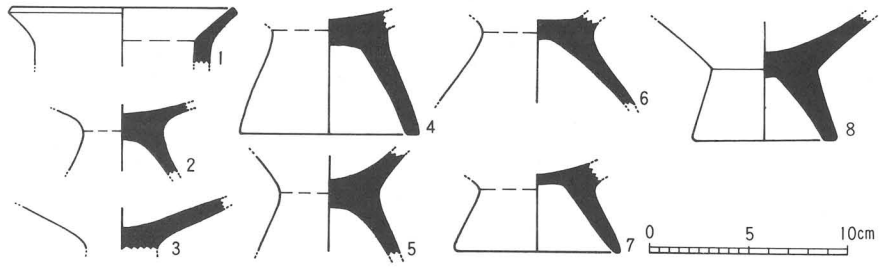


图12 F地点表采土器实测图



图13 B地点遺構分布图

第2節 B地点の調査（図版2）

B地点は、工事用道路によって切り崩された面から、炭化物と焼土の混じった落ち込みが2ヶ所、分布調査時に発見されたところである。標高38m～39mの丘陵頂上に立地する。調査の結果、竪穴等を検出した。以下、遺構と遺物について述べる。

1 遺構と遺物

(1) 1号竪穴

ア 遺構（図14、図版2・8）

1号竪穴は、調査区の南端に位置している。南東側を開墾によって、南西側を工事用道路によって切られている。

被覆土は、4層にわかれる。第1層（表土）は黒色砂質土。第2層は淡褐色粘質土で、床面の一部を覆っている。第3層は炭化物混入層で、床面を覆う。第4層は炭化物層で、床面中央付近にのみ分布する。遺物は、第2層ないし第4層から出土しており、床面直上が多かった。埋没状況は、北側からの流れ込みを示している。

プランは、残存する部分からみて、隅丸の方形か長方形を呈すると考えられる。北西側の壁高は40cmで、ゆるやかに立ち上がる。U字状の周溝を伴う。溝は、幅10cm～20cm、深さ5cm前後で、一部細くなっているところもある。床面は平坦である。床面に厚さ2cm前後の粘土層が、面をなして点在しており、貼床の可能性も考えられる。

竪穴の中央にあたるとみられる一面に、厚さ約2cmの炭化物層がひろがっている。その下の面は焼けて赤くなり焼土化している。ここが炉址と考えられる。焼土層は、中央部が最も厚く5cmを測り、末端に向い薄くなっている。炭化物は細片ばかりでなく、長さ40cm程で厚みが5cm大のものもあり、火災にあった可能性が考えられる。この他、ピットを2個検出した。大きさは表2のとおりである。

表2 1号竪穴ピット寸法（単位cm）

記号	径	深さ	備考
P ₁	25～28	15	中程に段がある
P ₂	28～30	25	中程で径が小さくなる

本竪穴の北に2号竪穴がある。それとの床面の高さを比較すると、本竪穴が約35cm低い。

イ 遺物（図15、図版10）

床面から出土した遺物についてみる。すべて器表面が剥落し、遺存状態は不良である。

弥生土器

高環形土器（図15-1～3） 1は口縁が外開きの盤状を呈し、これに柱状の高い脚台をつける。脚台には、3個の円孔をうがつ。坏部に籥描き波状文の痕跡が残っている。2は脚台のみで、3個の円孔をうがつ。3の坏部はゆるやかな丸味をおびて立ち上がりが深い。

甕形土器（図15-4） 炭化物層から出土した。薄手のものである。この他、小片ゆえ図示できなかったが、同じ層から別の甕形土器が2個出土している。

壺形土器（図15-5） ピット近くの壁寄りから出土した。丹が塗られている。

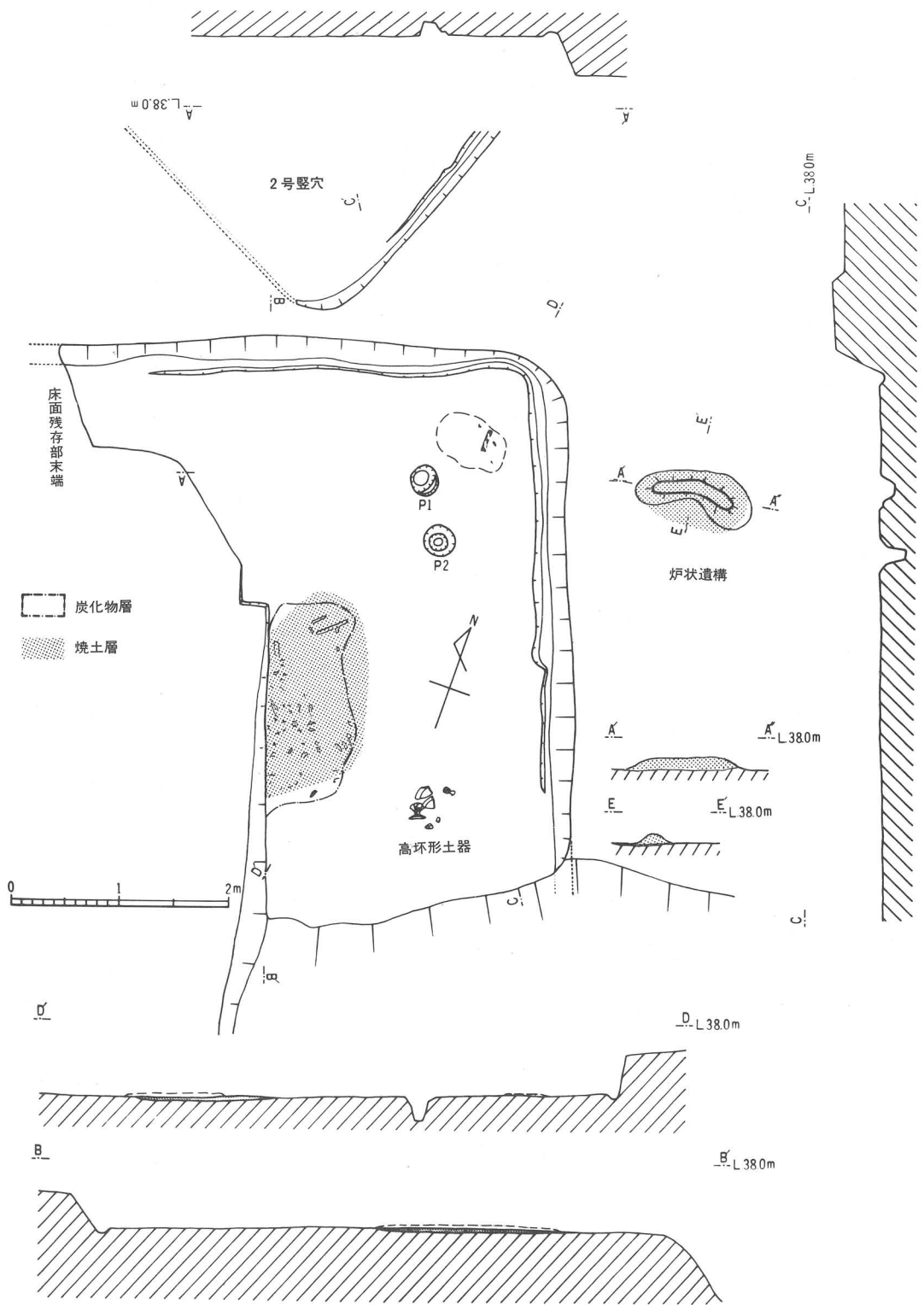


图14 1号竖穴·炉状遺構実測図

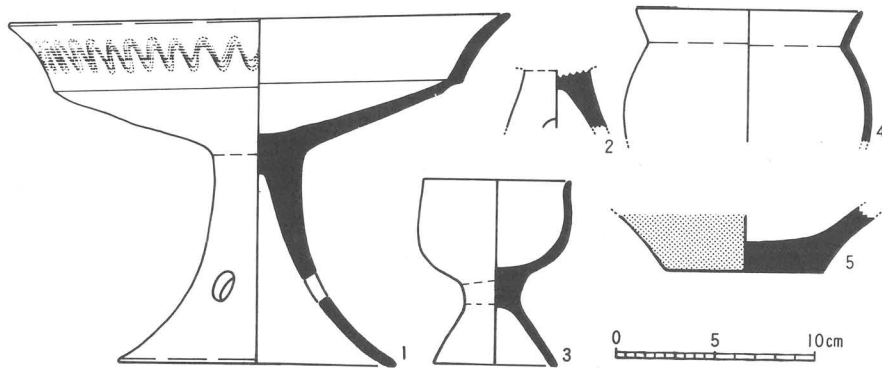


図15 1号竪穴出土土器実測図

(2) 2号竪穴

ア 遺構 (図16・17、図版3・4・8)

2号竪穴は、調査区の南部にあり、1号竪穴の北に位置している。南西側の壁が、溝などによって一部切られている。

被覆土は、4層にわかれる。第1層(表土)は黒色砂質土。第2層は黄褐色砂質土で、床面の一部を覆う。第3層は黄色砂質土のブロックを混入する褐色砂質土で、床面を覆っている。第4層は炭化物混入層で、竪穴の中央付近にのみひろがっている。遺物は、第2層ないし第4層から出土している。埋没状況は、北東側からの流れ込みを示している。

プランは、隅丸の台形状を呈する。規模は、北東側が6.5m、南西側が7.9m、その間の長さが6.6mを測る。床面は平坦だが、壁高は異なる。それは、本竪穴を設けた地山面が、南西に向い傾斜していることから生じ

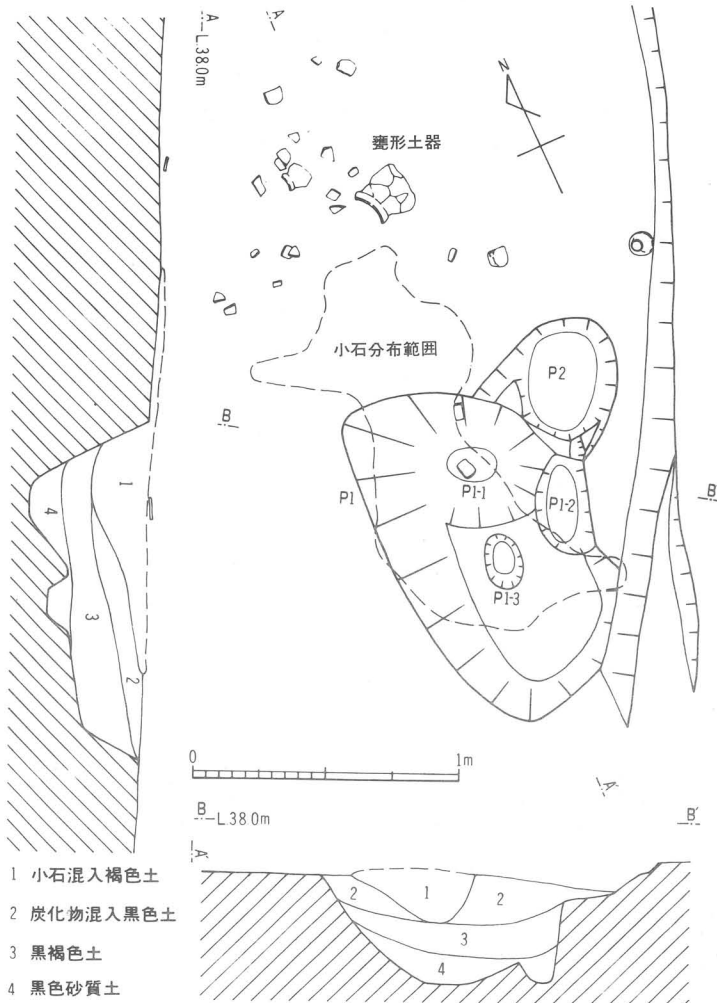


図16 2号竪穴内土壌実測図

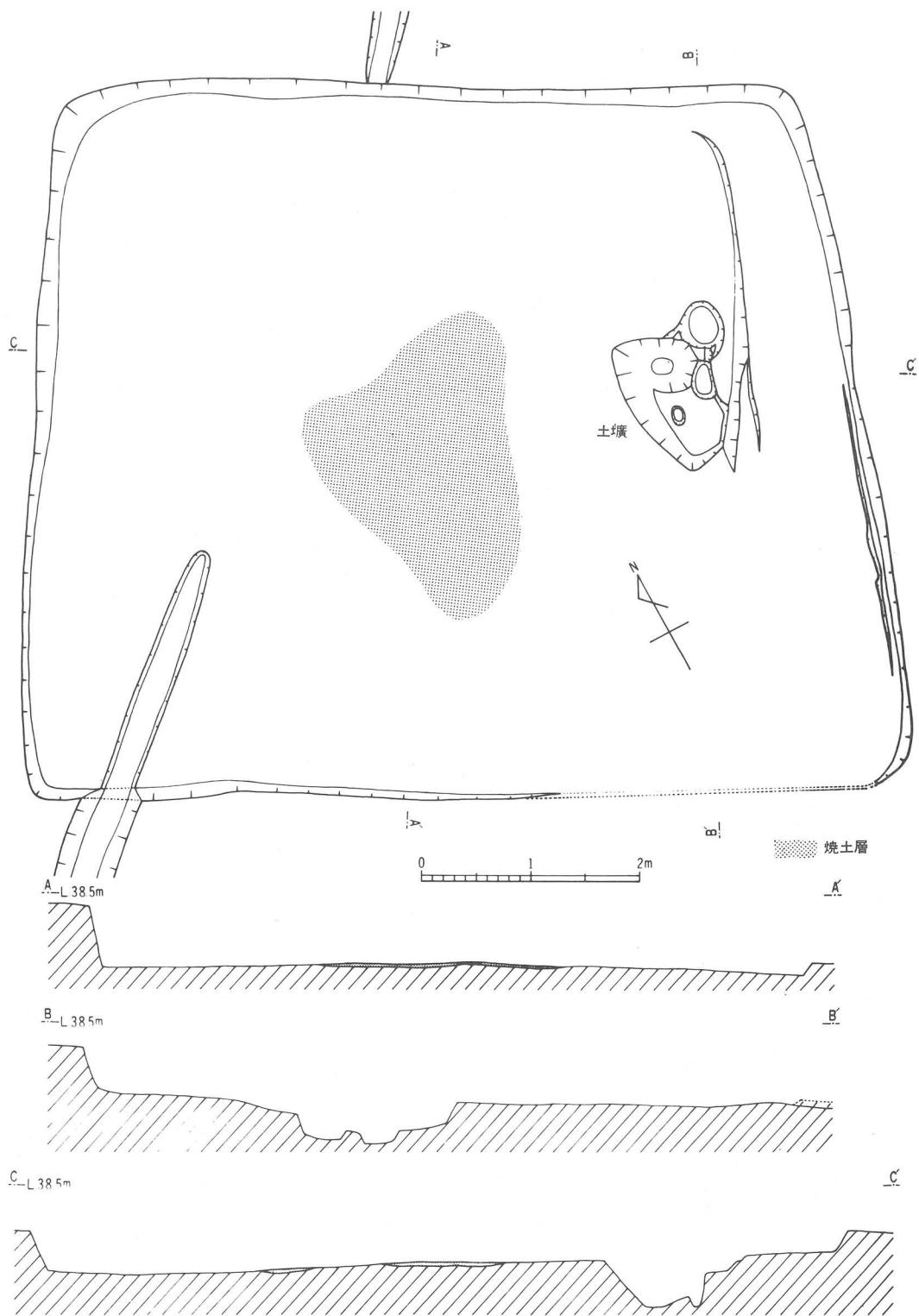


图17 2号竖穴实测图

ている。すなわち、北東側の壁高50cm前後、南西側の壁高13cm前後を測る。壁は、垂直気味に立ち上がる。

床面の中央付近に焼土面がひろがっており、炉址と考えられる。その厚さは中央部が厚く8cmを測り、末端になるに従い薄くなっている。床面には全体に点々と炭化物が認められた。床面の高さが一部異なる個所がある。それは、南東側の壁に沿った北寄りのところで、幅約80cm、長さ約3mにわたり、5cm~10cm高くなっている。この壁の南寄りに、U字状の溝が2.7m程めぐっている。この溝は幅10cm、深さ3cmを測る。

表3 2号竪穴内土壌寸法(単位cm)

記号	径	深さ	備考
P ₁	76~136	30	
P ₁₋₁	50~70	(15)	竪穴床面からの深さ45
P ₁₋₂	20~40	(9)	" 39
P ₁₋₃	19~21	(8)	" 38
P ₂	46~56	52	

床面の東寄りに、複雑な形をした土壌(図16)がある。土壌の上面には、0.5cm~11cmの小石を混入する層が、1.8m×0.8mの範囲に分布していた。土壌の大きさには、表3に示すとおりである。土壌内の被覆土は、前述した小石混入の層を含めて4層にわかれる。遺物は、土器の細片が第2層の炭

化物混入黒色土と第3層の黒褐色土から出土した。

竪穴の南西側角付近が溝によって切られているが、この溝は北東側から続くもので、溝内から近世の磁器片が出土しており、本竪穴に伴う溝ではない。

イ 遺物(図18・図版9・10)

竪穴の被覆土と床面から出土した。土器はすべて小片で、器表面が剥落し遺存状態は不良である。

(ア) 弥生土器

甕形土器(図18-1~4・9)すべて床面から出土した。1・3は土壌の北寄りから出土。3は胎土が粗い。9はS字口縁である。

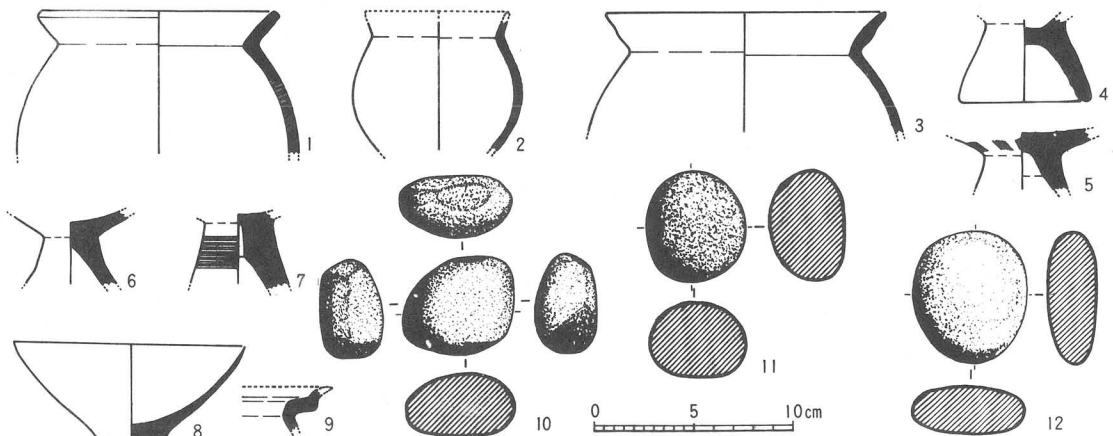


図18 2号竪穴出土土器・石器実測図

高環形土器（図18-5～7） すべて床面近くから出土した。5の環部の内面底部は平坦である。7は脚部に横位の刷毛目がみられ、3個の円孔をうがつ。

鉢形土器（図18-8） 第2層から出土した。口端が尖り、薄手のものである。口径12cm、底径3.5cm、器高5cmを測る。

この他、図示できなかったが、弥生時代後期欠山式の特徴を有する壺形土器が出土している。

(イ) 石器（図18-10～12）

すべて床面から出土した。10は両先端部と側縁の一部に敲打痕を有する敲石で、重量は130.4g。材質は片麻岩製。11・12は表面が滑らかで、磨石とみられる。11はほぼ球形で、重量は163g。材質は花崗閃緑岩製。12は偏平で、重量は142.9g。材質は片麻岩製。

この他、4cm～11cm大の自然礫が7個、床面に点在して出土した。

(3) 3号竪穴

ア 遺構（図20、図版5）

3号竪穴は、4号と切り合っている。本竪穴は、床面とみられる平坦面に、他の竪穴と同様の炭化物混入層がひろがり、壁と考えられる立ち上がりの一部検出されたので、竪穴と判断したもので、詳細は不明。4号竪穴より早く設けられたと考えられる。

イ 遺物（図19-8）

弥生土器の甕形土器が、床面上から1個出土した。遺存状態が不良で、全体を知ることができなかった。器形としては、球形の胴部に直行する頸部と外開きになる口縁がつく。

(4) 4号竪穴

ア 遺構（図20、図版6・8）

4号竪穴は、調査区の南部にあり、2号竪穴の南西に位置している。西側の一部が切られている。被覆土は、3層にわかれる。第1層（表土）は黒色砂質土。第2層は黄褐色砂質土で、床面を覆う。第3層は炭化物混入層で、竪穴の中央付近のみひろがっている。遺物は、第2層・第3層から出土した。埋没状況は、北東側からの流れ込みを示している。

プランは、変則的なものである。すなわち、壁が全体にめぐらず、北東側の面にのみみられ、他は周溝がめぐって区画をなしているのである。壁は、周溝の北角付近から立ち上がり、北東側の面を形づくっている。この壁も東側角付近が攪乱を受けてはっきりしないが、北側のように溝に接し

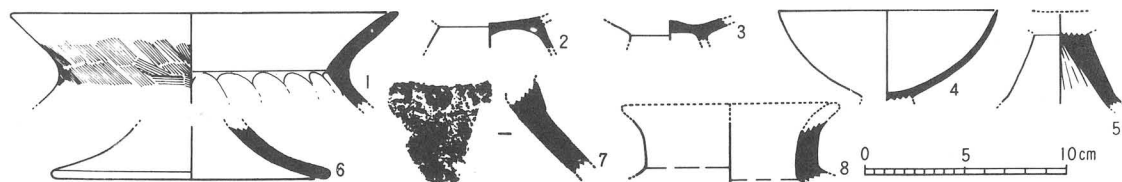


図19 3号・4号竪穴出土土器実測図

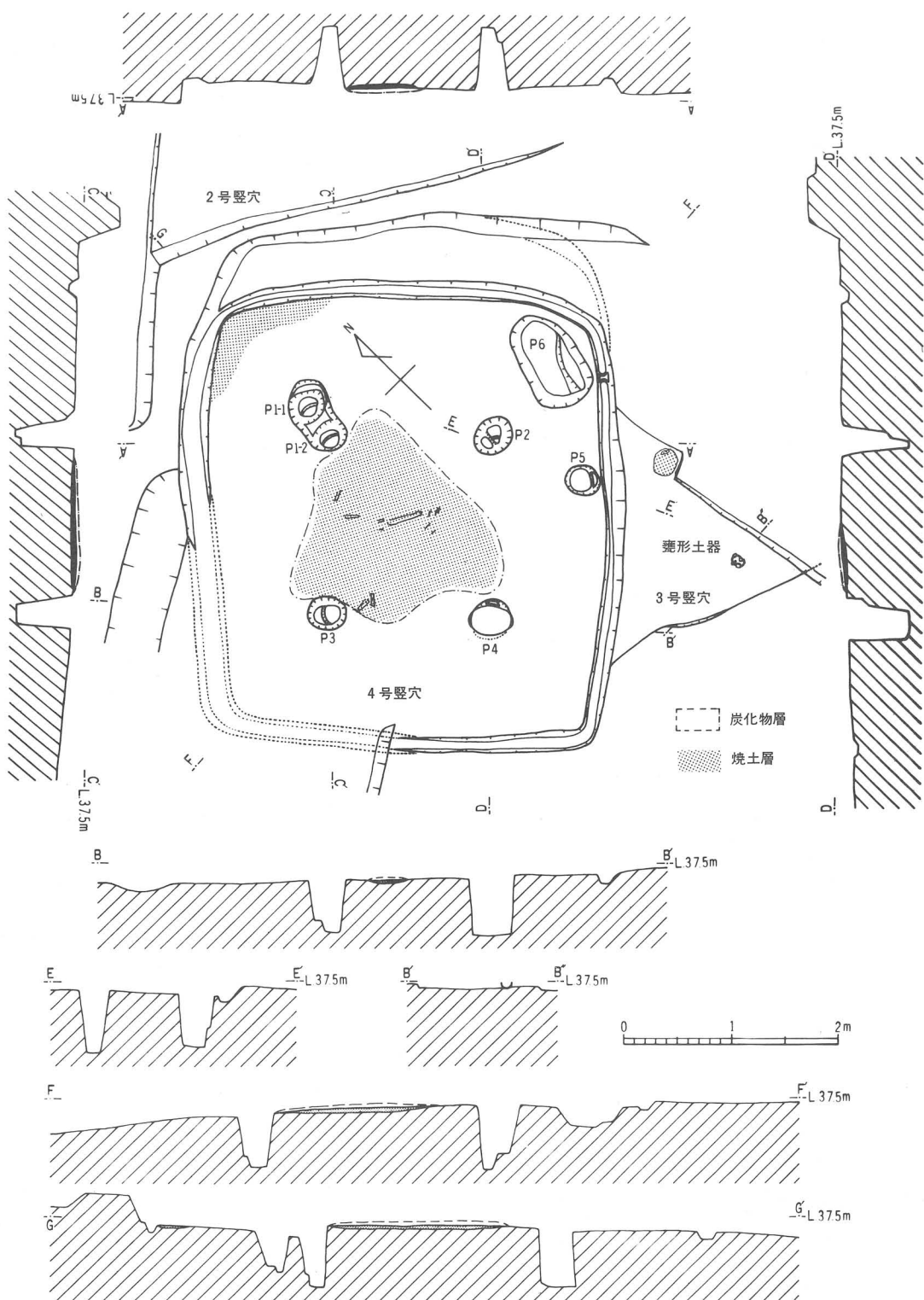


图20 3号·4号竖穴实测图

てめぐっていたと考えられる。周溝は、壁の直下にうがたれず、40cm前後の間をあけてめぐり、4.5m×4.1mの隅丸方形に近い形を呈する。この溝も西側角付近が切られているが、全周するとみられる。これに、前述した壁まで含めた場合のプランは、5m×4.1mの隅丸長方形を呈するのである。なお、壁高は30cm前後で、ゆるやかに立ち上がる。

表4 4号竪穴ピット寸法(単位cm)

記号	径	深さ	備考
P ₁₋₁	38~45	40	下方に段がある
P ₁₋₂	27~35	57	"
P ₂	32~40	61	"
P ₃	31~37	50	"
P ₄	35~42	52	中程に段があり、わずかに傾斜している
P ₅	28~32	50	中程に段がある
P ₆	55~95	20	

周溝に囲まれた部分の中央付近一帯に炭化物混入層がひろがり、その下の床面は焼土化している。焼土の厚さは、中央付近が5cmを測り、末端になるに従い薄くなっている。炭化物は、割合大きなものが残存しており、火災にあった住居の可能性も考えられる。

周溝のめぐり範囲内の床面からピットを7個検出した。すべて本竪穴に伴い、大きさは表4のとおりである。P₁₋₁とP₁₋₂は接してうがたれ、P₅は周溝寄りにうがたれている。P₁₋₂~P₄が対応して方形を呈する

ことから、支柱穴と考えられる。P₆は、前述したピットとはプラン等を異にしており、貯蔵穴と考えられる。

本竪穴の北東に位置する2号竪穴との床面の高低差は、本竪穴が約25cm低くなっている。

イ 遺物(図19)

竪穴の被覆土と床面から出土した。土器はすべて小片であった。

弥生土器

甕形土器(図19-1~3) 1は周溝の北角付近から出土した。口縁部が外方に広く開き、外面に横位の刷毛目調整がなされている。2・3は床面から出土した。S字口縁を付すものと考えられる。

高環形土器(図19-4~6) 4はピットP₄の中程から出土した。坏部は薄手の丸味をおびた碗状を呈する。

壺形土器(図19-7) 頸部の破片で、円形の貼り付け文を有する。内外面とも横位の刷毛目調整がなされている。

(5) 5号竪穴

ア 遺構(図21、図版5)

5号竪穴は、調査区西端の傾斜面に位置している。東側を工事用道路によって、西側を傾斜面によって切られている。

被覆土は、3層にわかれる。第1層(表土)は黒色砂質土。第2層は淡褐色粘質土で、床面の一

部を覆う。第3層は炭化物混入層で、床面の一部にひろがっている。遺物は、第2層・第3層から出土した。

プランは、残存する部分からみて、隅丸の方形か長方形を呈すると考えられる。東側の壁高は20cmで、垂直気味に立ち上がる。床面は西側に向いわずかに傾斜している。

イ 遺物 (図22)

竪穴の被覆土及び床面から出土した。土器は小片で、遺存状態の不良なものが多い。

弥生土器

高坏形土器 (図22-1~3) 1は柱状に近い脚台で、脚端に向い内側に湾曲する。3は脚台に3個の円孔をうがつ。

この他、器台形土器 (図22-5) 甕形土器 (図22-4) が出土している。

(6) 6号竪穴

ア 遺構 (図23、図版7)

6号竪穴は、調査区の北部に位置する。東側を7号竪穴によって、切られている。

被覆土は、2層にわかれる。第1層 (表土) は墨色砂質土。第2層は褐色砂質土である。遺物は、第2層から出土している。

プランは、隅丸の台形状を呈する。規模は、北東側が7.3m、南西側が8.3m、その間の長さが7.3mを測る。壁高は一律ではなく、南東側が高く25cm~30cm、北西側が5cm前後を測る。壁は、ゆるやかに立ち上がる。

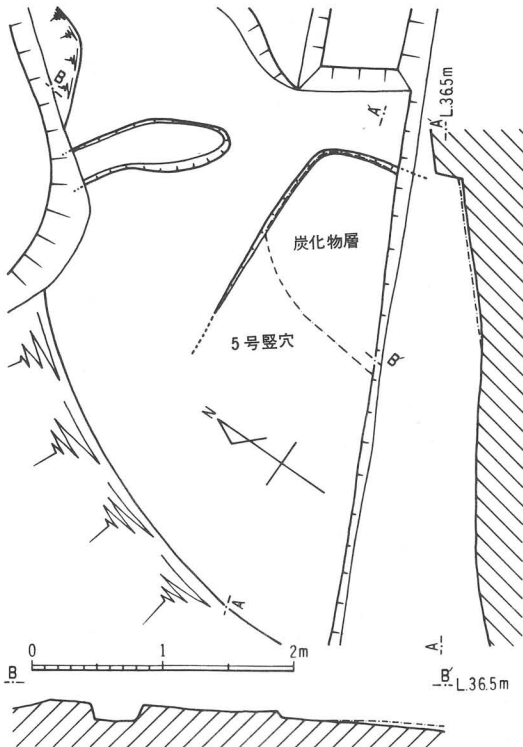


図21 5号竪穴実測図

床面の中央付近に、一方を開口した形を呈する浅い落ち込みがある。炉址とも考えられるが、焼けた痕跡は認められなかった。この北西側で、炭化物と土器が混在して出土した。また、北東側に径33cm~55cmの範囲にわたり炭化物層が分布していた。この下の床面は焼土化していた。

床面の南西側で、ピットを2個検出した。P₁は本竪穴に伴い、P₂は後世に掘り込まれた溝の一部で、本竪穴に伴うものではない。P₁は、60

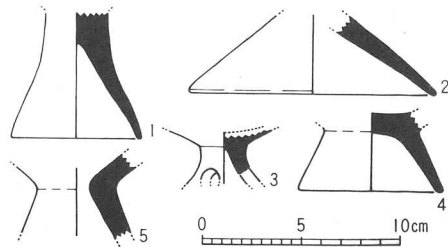


図22 5号竪穴出土土器実測図

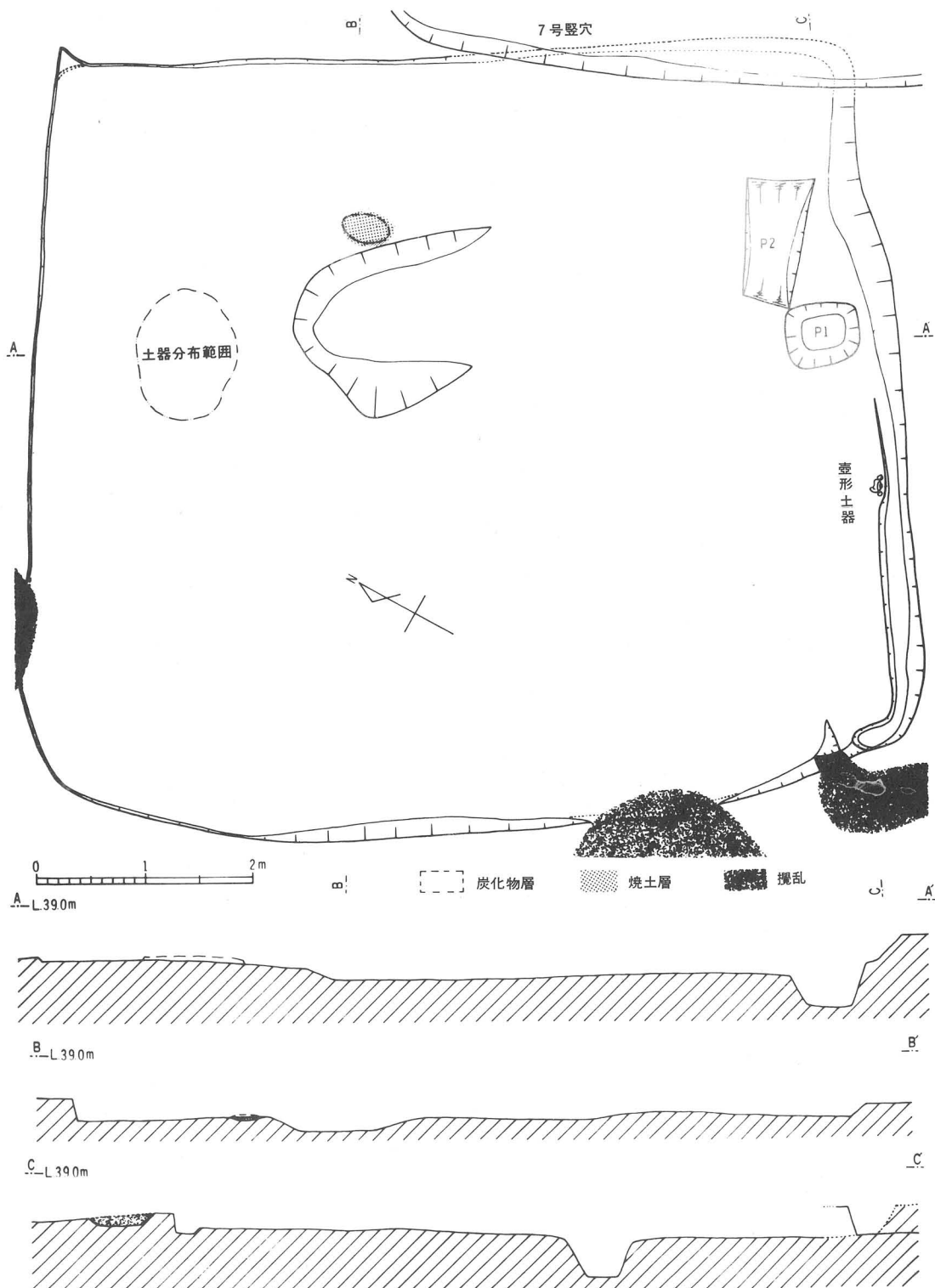


图23 6号竖穴实测图

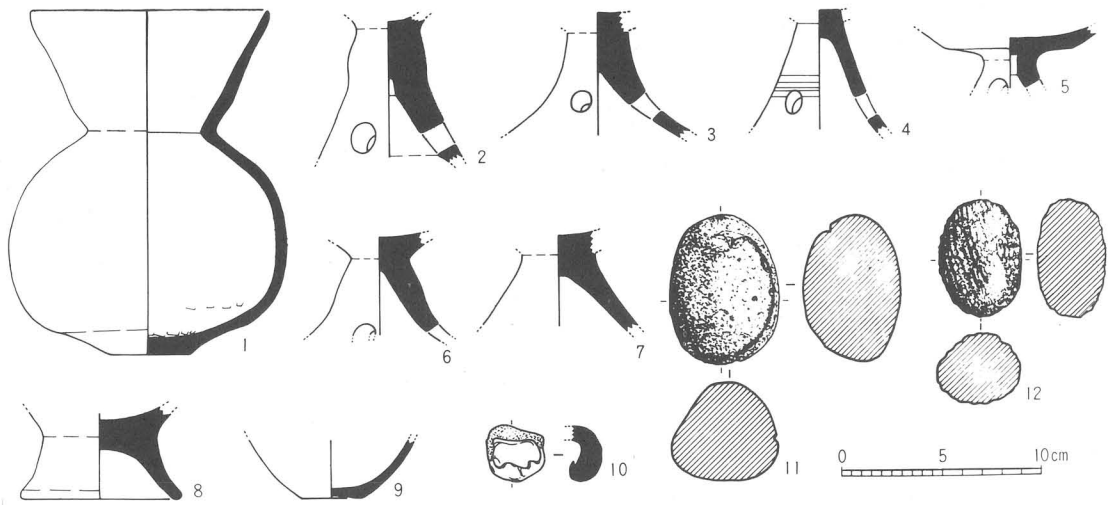


図24 6号竖穴出土土器・石器実測図

cm×70cmの隅丸方形を呈し、深さは35cmを測る。この他、U字状の溝が南東壁の南角寄りに、3.5m程めぐっている。溝は、幅25cm～30cm、深さ5cm～10cmを測る。

本竖穴は、2号竖穴と同様のプランを呈する。そして、土壇と周溝の位置も類似している。ただ、2号竖穴は整然とした台形状を呈するが、本竖穴の長辺にあたる南西側の壁の両脇はやや屈折している。それと、焼土面のひろがりに差異が認められる。以上の相違があるものの、全体としては同じ用途を有する竖穴と考えられる。

イ 遺物 (図24、図版9・10)

竖穴の被覆土と床面から出土した。土器は遺存状態の不良な小片が多い。

(ア) 弥生土器

壺形土器 (図24-1・9) 1は南東側の壁の中程から溝に接して、図24-13の楕円球の礫と8cm大の自然礫とともに出土した。1の器形は、下胴部の張った偏球形の胴部に、長くのびた口頸部をつける。胴部内面下半に、ヘラ削りの痕がみられる。9は球形の胴部を呈するとみられ、底部は上げ底である。

高環形土器 (図24-2～7) すべて脚台のみである。2は上部にふくらみをもつ。4は櫛描き横線文をめぐらす。2～6は3個の円孔をうがう。7は厚手のものである。

甕形土器 (図24-8) 8の他、S字口縁の破片もみられた。

(イ) 土製品 (図24-10)

床面に密着して出土した。黒色を呈し、全体の形態は不明である。残存する部分からみて、鈴のような形が考えられる。

(ウ) 石器 (図24-11・12)

床面から出土した。11は長径方向の先端部に敲打痕が認められ、重量は255.3g。材質は花崗斑岩製。12は形体が整っていることから石器としたが、用途は不明である。表面の凹凸が激しく、楕円

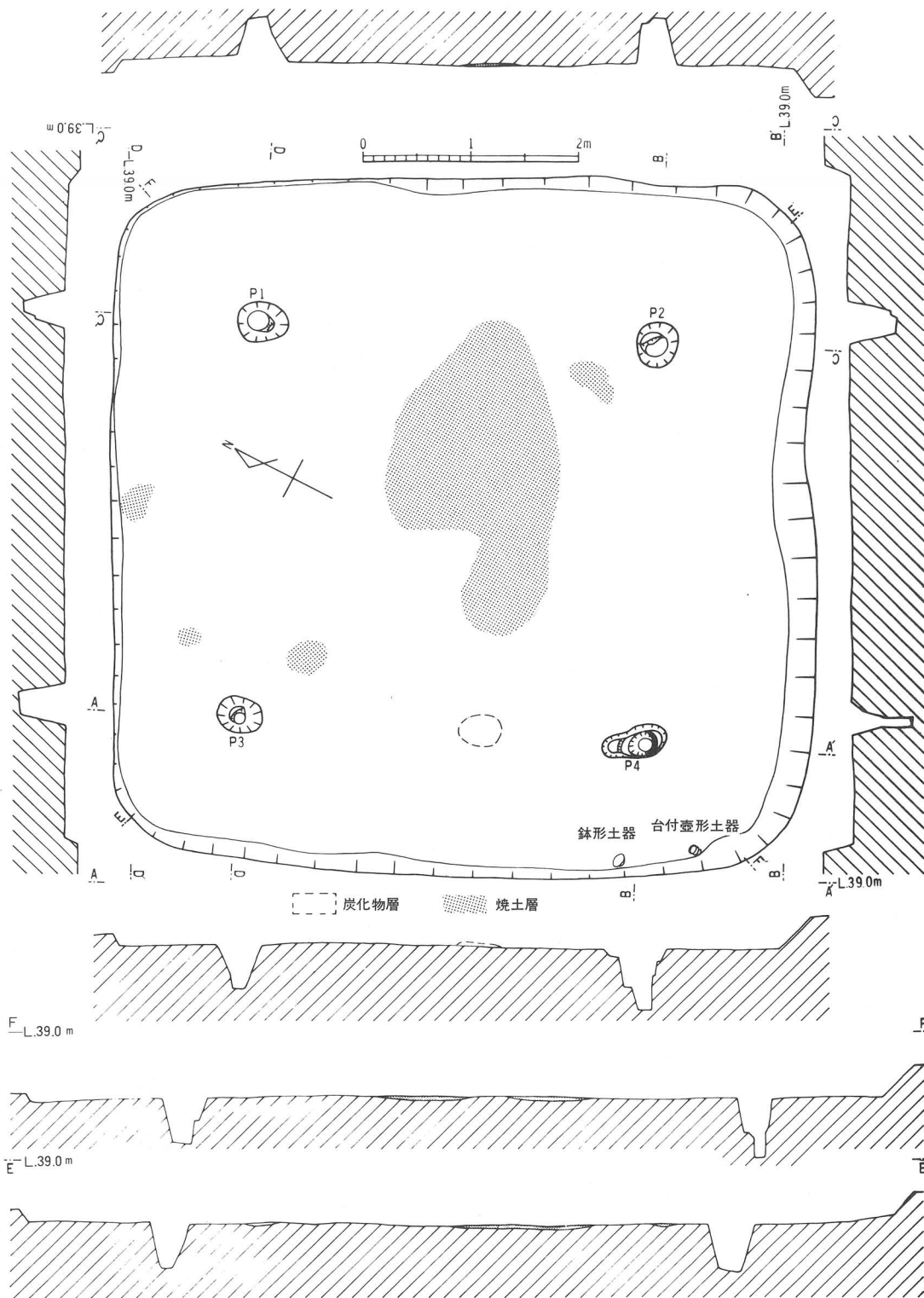


图25 7号竖穴实测图

球を呈する。重量は126.2g。材質は閃緑岩製。

この他、8cm～14cm大の自然礫が6個、床面から出土した。

(エ) 自然遺物

床面から炭化した種子が1個出土した。

(7) 7号竪穴

ア 遺構 (図25、図版7・9)

7号竪穴は、調査区の北部に位置し、6号竪穴を切り込んでいる。

被覆土は、4層にわかれる。第1層(表土)は黒色砂質土。第2層は黒褐色砂質土。第3層は、黄色粘質土のブロックを混入する茶褐色砂質土で、床面を覆う。第4層は炭化物混入層で、床面中央付近のみに分布する。遺物は、第2層ないし第4層から出土しており、床面直上が多かった。

プランは、6.5m×6.5mの隅丸方形である。壁高は、北東側が低く13cm、南西側が高く25cmを測

表5 7号竪穴ピット寸法(単位cm)

記号	径	深さ	備考
P ₁	40～47	43	下方に段がある
P ₂	38～43	44	"
P ₃	33～43	41	"
P ₄	31～61	57	"

る。床面は平坦で、6号竪穴の床面と同レベルにある。竪穴中央付近に焼土面がひろがり、その厚さは中央部付近が5cmを測り、末端になるに従い薄くなる。焼土面は、他にも北西側に3ヶ所点在している。炭化物層が2ヶ所あり、厚さ3cm～5cm、径20cm～40cmを測る。周溝はない。

床面からピットを4個検出した。大きさは表5のとおりである。それぞれが対応して方形を呈し、支柱穴と考えられる。ピット間は3.3mを測る。

イ 遺物 (図26、図版9・10)

(ア) 弥生土器

台付壺形土器 (図26-1) 床面から出土した完器。扁球形を呈す胴部に、短い口縁部がつく。

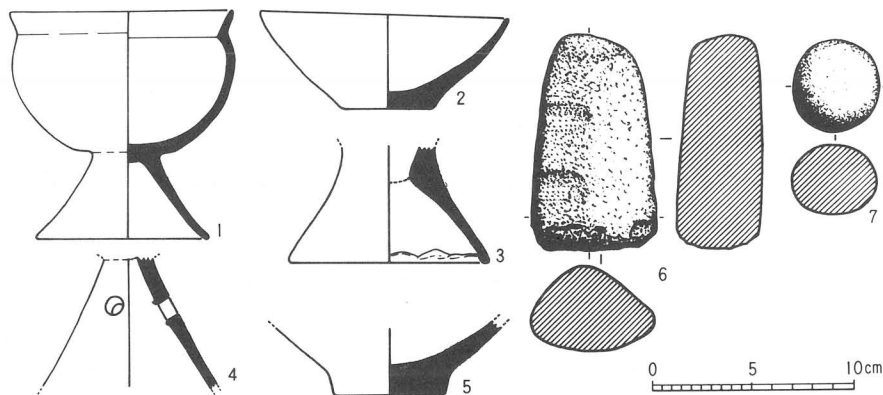


図26 7号竪穴出土土器・石器実測図

脚台は、裾に向ってゆるやかに広がる。器面の内外面は、きれいにへら磨きを加えられている。

鉢形土器(図26-2) 前述した土器のすぐ近くから出土した完器。浅鉢形で、器面が底面に至るまできれいにへら磨きを加えられている。

この他、壺形土器(図26-5)、甕形土器(図26-3)、高环形土器(図26-4)が床面から出土した。また、図示できなかったが、丹の塗られた壺形土器の破片も出土している。

(イ) 石器(図26-6・7)

床面から出土した。6は長径方向の先端部に敲打痕があり、長径方向に対して横位に2ヶ所すりへってくぼんだ面が認められる。重量409gの敲石である。材質は石英斑岩製。7は全体が滑らかで磨石と考えられる。球形を呈し、重量は100g。材質は砂岩製。

(8) 竪穴以外の遺構と遺物

(ア) 遺構(図13、図14)

1号竪穴の東寄りの地山面に、ゆるやかに湾曲した土堤状の遺構〔炉状遺構(図14)〕を検出した。規模は、高さ10cm、幅約30cm、長さ1.1mを測り、全体が焼けて赤くなっている。遺物は伴出しなかったが、前述した竪穴群と同時期のものと考えられる。本遺構は、火力を受けていることから、炉として使用されたと考えられる。

次に、2号竪穴の東方5m~10mの範囲にわたって土器がまとまって出土した(図13の土器群)。この地点には、わずかではあるが焼土も認められた。土器は、竪穴群と同時期の特徴をもち、高环形土器、壺形土器、甕形土器が出土した。竪穴等の遺構はなく、野外における食生活に関する作業が行なわれたことが想像される。

土器群の約4m南で、土壙を1個検出した。プランは楕円形で、短径75cm、長径110cm、深さ50cmを測る。被覆土から、弥生土器の破片が出土した。

イ 遺物(図27、図版9)

(ア) 弥生土器(図27-1~3)

調査終了後、B地点内から採集した。1・2は高环形土器で、柱状の高い脚台である。1は細い楕描き横線文をめぐるしている。と

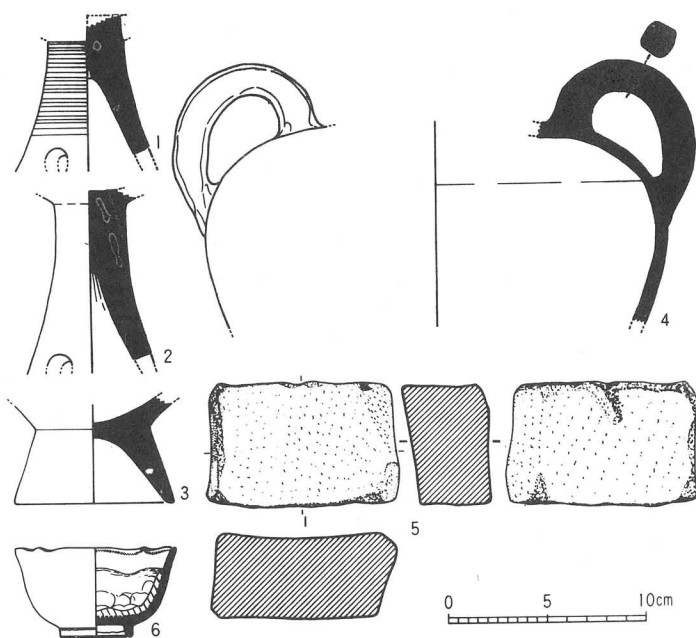


図27 竪穴外出土遺物実測図

もに3個の円孔をうがつ。これらは、1号竪穴から出土した高环形土器（図15-1）と同時期の特徴を有する。3は台付甕形土器の脚台である。その他、壺形土器も出土している。

(イ) 須恵器（図27-4）

表土を除去して、6号竪穴のプランを検出した面から出土した。比較的大きな把手を有し、壺とみられる。外面に暗緑色の自然釉が付着している。内面は横なでの調整がなされている。把手の断面は四角形を呈する。

(ウ) 石器（図27-5）

砥石。表土を除去し、7号竪穴のプランを検出した面から出土した。破損した面を除く四面全部が使用されている。材質は砂岩製。

(エ) 陶器（図27-6）

前述した砥石の近くから出土した。施釉陶器で、口縁部に輪花様の意匠が4個つけられている。高台の端部は面とりされている。内面には、口縁にそって黒色釉による線が描かれている。碗内には、灰色の石灰質の物質が厚く付着している。

2 まとめ

(1) 遺構

ア 竪穴の時期

各竪穴の営まれた時期についてみる。竪穴に伴出して出土した土器は少なく、その組成も不明確で、土器型式の比定は困難なものである。一応、伴出した個々の土器の特徴についてみると、次のようである。

1号竪穴の床面から出土した高环形土器（図15-1）は、寄道式の特徴を有する。6号竪穴の溝寄りの床面から出土した台付壺形土器（図24-1）と鉢形土器（図24-2）は、欠山式の特徴を有する。2号竪穴ないし5号竪穴から出土した土器は、欠山式に属するとみられる。

上記の点からみて、B地点で竪穴の営まれた時期は、弥生時代後期の寄道式から欠山式と考えられる。

イ 竪穴の用途

各竪穴の用途は、形態と出土遺物等の様相からみて、竪穴住居跡として捉えることができる。ただ、2号竪穴と6号竪穴については、疑問が残る。すなわち、プランのほぼ全容を知り得た2号・4号・6号・7号竪穴を比較してみると、次の相違が認められるのである。

- ① プランを比較すると、2号・6号竪穴は台形で、4号・7号竪穴は方形か長方形を呈する。
- ② 柱穴の有無をみると、2号・6号竪穴はなく、4号・7号竪穴はある。
- ③ 床面積をみると、2号竪穴約47m²、4号竪穴は周溝外の平坦面も含めて約20m²、6号竪穴約52m²、7号竪穴約42m²で、2号・6号竪穴がやや広い。
- ④ 出土遺物のうち、土器の組成はほとんど変らないが、2号・6号竪穴の床面から数個の自然礫が出土している。

記号	規模 (m)	形態	柱穴の有・無	図番号	伴出遺物	遺物図番号	土器型式	備考
1号		隅丸方形か長方形 (推定)	有	図14	高環形土器 壺形土器 甕形土器	床面出土 図15-1~5	寄道式 (山中式)	貼床の可能性あり。 火災にあった可能性あり。
2号	(短辺)6.5×(長辺) 7.9×(斜辺)6.6	隅丸台形	無	図16	甕形土器 高環形土器 石器類	床面出土 図18-1~7、9~12 被覆土出土 図18-8	(欠山式)	
3号			(無)	図20	甕形土器	床面出土 図19-8	(欠山式)	
4号	5×4.1(周溝のめぐ る規模4.5×4.1)	隅丸長方形	有	図20	甕形土器 高環形土器	床面出土 図19-1~3 被覆土出土 図19-5、6 ピット内出土図20-4	(欠山式)	火災にあった可能性あり。
5号		隅丸方形か長方形 (推定)	(無)	図21	高環形土器 台付甕形土器 器台形土器	床面出土 図22-1、3、4 被覆土出土 図22-2、5	(欠山式)	
6号	(短辺)7.3×(長辺) 8.3×(斜辺)7.3	(隅丸台形)	無	図23	壺形土器 高環形土器 小形土製品 石器類 (種子1)	床面出土 図24-1~3、5、9~12 被覆土出土 図24-4、6	欠山式	
7号	6.5×6.5	隅丸方形	有	図25	台付壺形土器 鉢形土器 高環形土器 甕形土器 石器類	床面出土 図26-1~7	欠山式	

表6 B地点竪穴の規模等一覧表

といった点である。特に②の条件から考えれば、2号・6号竪穴は、4号・7号竪穴から捉えられるような、4本の主柱を配置して上屋を構えた家屋構造とは別の構造物の可能性があり、構造の違いと、①、③、④の条件を考慮して、用途の違いも想起されるのである。

B地点は、丘陵の頂上にあり、風が非常に強く吹きつける。このことは、調査時に幾度も経験した。勿論、往時も現在のような環境にあったと速断はできないが、このような場所に営む住居としては、主柱を地中に埋けて上屋を設けたものが合理的であると考えられる。2号・6号竪穴が住居跡とするならば、こういった条件にも合致しないのであり、疑問点として留意しておきたい。

(2) 遺物

ア 土器の出土状態

ほとんど破損せず完器として出土したものと、割れてはいたが1個体分がまとまって出土した土器の出土状態をみてる。

1号竪穴から出土した高坏形土器2個(図15-1・3)は、床面に立っていたものが倒れた状態であった。2号竪穴から出土した鉢形土器(図18-8)は、被覆土中から出土し底部を上にして引っ繰り返った状態であった。6号竪穴から出土した壺形土器(図24-1)は、床面上から出土し横に傾れた状態であった。7号竪穴から出土した台付壺形土器(図26-1)と鉢形土器(図26-2)は、竪穴の角の床面上から出土し、ともに底面を床面に接し、現位置に置かれた状態に近かった。

この他、破片となったもので、床面から出土したものは、面上に置いたような状態で出土した。また、甕形土器の破片は、床面上にひろがる炭化物層内から出土したものが多かった。

イ 石器の様相

敲石に2種類認められる。1つは、7号竪穴から出土したもの(図26-6)で、手に握って力を加えたとみられる。もう1つは、2号竪穴から出土したもの(図18-9)で、前述した敲石より小さく、重量も3分の1程で指先につまんで力を加えたとみられるものである。6号竪穴から出土した敲石(図24-11)は後者に属しよう。

磨石とみられる石器が、2号・7号竪穴から出土している。図18-10と図26-7は、球形をした自然礫の可能性もあるが、磨石でないとしても、住居に伴って出土しており、何らかの用途を有していたものと考えられる。

参考文献

- 久永春男、1955：各地域の弥生式土器・東海。杉原莊介編「日本考古学講座4」。75～87頁。東京・河出書房。
- 久永春男、1966：弥生文化の発展と地域性・東海。和島誠一編「日本の考古学Ⅲ弥生時代」。162～184頁。東京・河出書房。
- 大参義一、1968：弥生土器から土師器へ——東海地方西部の場合——。名古屋大学文学部研究論集X L VII 史学16。65～98頁。名古屋。

第4章 総括

1 調査にあたって

昭和55年の新春、学校の第3学期授業が開始されて早々、東海市教育委員会の社会教育課長をしている皆川英哉氏の来訪をうけた。皆川課長とは旧知の関係であり、来訪の趣旨をうかがうと、中ノ池周辺の区画整理事業によって、新発見の遺跡からの出土した件について、遺物を提示されて所見をもとめられたのである。

中ノ池南方の丘陵地帯に区画整理事業が進められていることはかねてから承知しており、平素は名鉄電車の窓から遠く望見しているところである。そして遺跡の新発見についても、すでに池田陸介氏（東海市文化財調査委員）より、新年の年賀状にて速報をうけていて、丘の上の弥生遺跡として注目していたところである。採集された遺物を見ると、すべてが標高30m程度の丘陵の頂部に近い平坦面から出土していて、ほとんどが近世以降の陶磁器片であるが、採集地点別に区別された1部には、明らかに弥生後期の土器片が数片まとまっていて、偶然の採集ではないことを物語っていた。

私は古窯をもとめて、知多半島の丘陵地帯を踏査する機会が多いのであるが、時おり弥生後期あるいは古式の土師器のピットに出会う機会があり、特に近年、知多市において高所性遺跡の大廻間遺跡を調査してから、こうした台地の上の遺跡に関心をもって、広い範囲の研究者と資料の交換をすすめていた矢先であり、具体的には同志社大学の学生である大竹宏之君より、大阪湾の沿岸にも知多半島の伊勢湾沿岸と同様な高所性遺跡が多く、軍事的・防禦的な興味ある遺跡の性格を指摘されていた矢先であった。こうした経験から、遺跡は丘陵の頂部に広がる、割合に平坦な地域に限定されるのではないか。したがって区画整理地域の全面ではなくて、現在すでに遺物が発見されている地点を中心として、台地の上の部分にトレンチを広げた範囲で足りるのではないか、という見解をのべた。ところで、今次の発掘調査を私に担当して欲しいとの要請については、いささか躊躇した。皆川課長とは旧知の仲であるが、何しろ酷寒の1月・2月の候に標高30mの丘で、吹きすさぶ鈴鹿おろしにさらされての作業は、私の最も苦手とするところである。しかし東海市の中ノ池周辺は、私が考古学に志してから宿縁の土地である。すなわち昭和27年に調査した柳が坪遺跡は丘陵からおりた麓に近く、とりわけ昭和31年に発掘した岩屋口古墳の石室の上から、名鉄河和線の走っている支谷をへだてて中ノ池を望んだ景観は、谷頭水田を拡張して水利を考えた古代の土豪の、支配形態を偲ぶロマンがあった。さらに知多市八幡の法海寺の奈良朝瓦は、工事区域内の藤塚で焼かれたという伝説があり、踏査をくり返したが未発見のまま残してあり、あるいは岩屋口古墳の他に、群集墳の仲間が検出されるのではないかという期待もあって、発掘調査を担当することにしたのである。

2 中ノ池遺跡調査の成果

中ノ池区画整理事業地内で、遺跡として調査したA・B・C・D・E・Fの6地点の中で、弥生時代の竪穴などの遺構を検出したのはB地点のみである。調査の成果については前章の報告に詳しいのであるが、B地点には7個の竪穴遺構が営まれていて、時代は弥生後期の寄道式から欠山式の時期と考えられるが、一応すべてが住居址と推定されている。ただ構造の面で7個の竪穴の中で、2号と6号の2個は全容をだしたにもかかわらず、柱穴をもっておらず、いわゆる主柱4本を配置した一般的な家屋とは別の建築のようであり、常識的な住居とは別の用途が想定される可能性をのべている。ともあれ低いとはいえ海岸に面した丘陵の頂上であり、冬期の北西季節風である鈴鹿おろしがまともに吹きつける地点である。

ところで、弥生時代の遺跡の中で、高地性集落と称して、防禦性を重視した山城風の集落が、西日本を中心として知られている。そして後漢書の中に「桓・霊の間、倭国大いに乱る」とあり、桓・霊の間(147~188)に倭の国々が互いに攻めあって争乱状態であったが、卑弥呼が女王となるにおよんで平和になったとのべている。時代は弥生時代の中期ないし後期にあっており、水田農耕を生活の基調とした弥生時代において、農耕に適した平地を離れ、水の乏しい風当たりの強いという、生活の日常性から全くかけ離れた丘陵の斜面や頂上に、比較的まとまった集落を定めていて、他の集団から攻められた場合、守り易い地形をねらっている。いわゆる高地性集落とか倭国大乱といわれているものである。

これに対して、知多半島の伊勢湾に沿った丘陵の上にもみられる高所性遺跡群の場合は、遺跡が営まれた期間が1時期であること、さらに遺跡の規模が小さい。すなわち、この中ノ池遺跡群でみられたB地点1号竪穴のみが弥生後期後葉の寄道式で、他の6個の竪穴はすべて弥生後期末の欠山式というように、ほとんど一時期という短い年月に終始しており、その営まれた年代も寄道式一欠山式という、3世紀ないし4世紀初頭に比定されて、西日本の高地性集落に比してやや新しいものである。そして遺跡の大きさも集落というにはあまりにも貧弱である。こうしたことから、短期間の使用に供した小屋のような住居、具体的にいえば農耕技術の進んでいない弥生時代においては、水田における稲穂の完熟時期も不揃いであって、もちろん一斉に稲刈りというわけにはいかず、収穫は熟したものから石包丁によって穂先を摘んだものであって、収穫の期間は長い。私たちは中ノ池遺跡のように知多半島の伊勢湾にのぞんだ台地の上に営まれた高所性遺跡を、稲穂の収穫作業がおこなわれている数か月に限っての、年毎の見張り小屋的な居住遺構として、寒い季節風の卓越する冬季の居住は考えないのである。

今、中ノ池南方の高所性遺跡に立って西方の低地をのぞむと、弥生中期から後期にわたる大きな歴代遺跡である柳が坪遺跡を遠望することができる。柳が坪の集落の水田地帯と推定される湿地帯は、さらに手前の近い距離に見おろすことができる。いいかえれば中ノ池遺跡群は、柳が坪遺跡を本拠とした人々が、集落の水田を管理するために設定した年毎の見張り小屋であったのであろう。

3 知多半島西岸の高所性遺跡

中ノ池遺跡群を柳が坪遺跡（註1）の管理施設に比定した場合、同様な性格の集落構成が、知多半島の伊勢湾に面した西海岸で多くみられるので、列挙してみよう。

- (1) 知多市の大廻間遺跡（註2）と細見遺跡（註3）
- (2) 常滑市の常石遺跡群（註4）と椎田口遺跡（註5）
- (3) 美浜町の田上遺跡（註6）と下高田遺跡（註7）

いずれも前にあげた大廻間・常石・田上の遺跡が高所性遺跡であって、後者の細見・椎田口・下高田の遺跡が集落の本拠地である。ただ常滑市の椎田口遺跡の場合は、常滑から半田へ通ずる主谷の低地の弥生遺跡であるが、採集されている資料が寄道式ならびに欠山式の弥生資料が3点という弱さもあり、ずっと以前に遺跡が消滅していて、常石遺跡の本拠地というには資料が不足している。約500m北方に高さ40m程度の台地があって、常石遺跡群として包括している弥生後期終末の小遺跡が立地しており、台地上の遺跡から椎田口遺跡の低地を見おろしている相互の地形を指摘するにとどめたい。美浜町の田上遺跡については、丘陵の頂上ではなく中腹である点が相違しているが、平坦面に大形壺・小形壺・甕・高坏など弥生後期終末のほぼ完全なセットをなす遺物が、濠状遺構の中から完形で出土している。そして遺跡から見おろすことのできる低地は、この谷で弥生集落にふさわしい下高田遺跡の背後の水田である。下高田遺跡は弥生前期の続水神平式に始まり、中期・後期にわたる南知多の弥生文化で最も大きな歴代遺跡で、本拠地にふさわしいものである。さらに知多市の大廻間遺跡は標高約30mの支丘の先端部にあり、舌状台地を横断した形で、幅も深さも約2.5mの濠状遺構が発見されている。濠の底には焚火の痕跡も検出され、濠内に多量の弥生後期の土器が良好な形で投げこまれており、一部には貝殻がつまっていた。住居址が存在したと推定される台地の上は、ブルドウザーによって平らに削られていて、土器を採集する程度にとどまったが、北側の谷から海を見とおした低地から、数年前に細見遺跡が発見されてきて、その中間の低地は弥生時代の水田として比定されている。細見遺跡は調査の結果、遠賀川式を含む前期・中期・後期の大集落であることが明らかになってきた。細見遺跡の背後の湿地は当時の水田と推定され、大廻間遺跡の位置から眼下に見おろすことが可能である。大廻間遺跡は舌状台地の先端部に住居をもち、台地との間を濠でもって遮断している。仲間の者は材木を渡せば楽に通行でき、夜間あるいは用のない時には撤去しておかれたものであろう。濠内で検出された焚火の跡は狼煙を意味するものであろうか。なお以上の他にも、この地域には弥生文化の時期の高所性遺跡が多く指摘される。美浜町の相模台遺跡（註8）や常滑市の城塚遺跡である。城塚遺跡は常滑市坂井にあり、名鉄電車知多新線の城塚トンネルの上で検出された小遺跡で、弥生後期終末の甕が1個復元されていた。

4 古墳時代の水田利用

中ノ池遺跡群として調査したD地点は丘陵の上ではなく麓の部分であるが、良好な須恵器が出土している。中ノ池の北方には河和線の谷をへだてた台地の中腹に岩屋口古墳が存在している。とくに岩屋口古墳の場合は、すでにのべた如く古代の土豪が支配下の水田に灌漑するための水利源とし

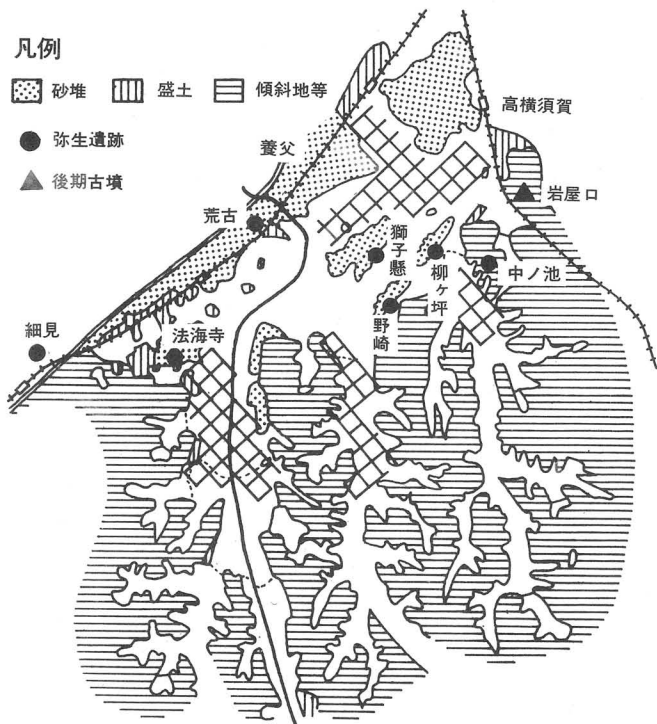


図28 条理制と古代遺跡分布図

て、谷頭部に中ノ池を築いたという関係が偲ばれるのであり、6世紀ないし7世紀の古墳の立地として水利の問題をみるのに格好な場所である。

今、6・7世紀いわゆる古墳時代後期のころの水田農耕を考えてみるに、岩屋口古墳の立地が中ノ池の堤防を正面に位置しているごとく、すでに灌漑用水による農業の成立を示しており、第一砂堆の後背部で支谷の奥へくいこんだ低湿地など自然灌漑のできる土地しか、水田として利用できなかった弥生農業をすでに脱却していることを物語っている。すなわち第二砂堆の高横須賀と第三砂堆の養父地内にはさまれた低地が、人工灌漑によって初期の水田として

成立していたものと推定したい。これらの土地には次の奈良朝時代になると、広範な区域が条理制水田として区画化（註9）している。中ノ池遺跡群の場所に立って、西方の低地を展望すると弥生時代、そして古墳時代、さらに奈良時代へと発展していく水田利用の姿が、図式化されてくるのである。

（杉崎 章）

註1 杉崎章『柳ヶ坪貝塚』横須賀中学校・昭和27年

杉崎章・石川玉紀・立松宏・磯部幸男・江原昭善『柳ヶ坪遺跡』東海市教育委員会・昭和46年

註2 杉崎章・磯部幸男・山下勝年・森下雅彦『大廻間遺跡』知多市教育委員会・昭和50年

註3 近刊『細見遺跡』知多市教育委員会

註4 『常滑市誌本文編』所収・昭和51年

註5 同上

註6 山下勝年「田上遺跡」(『下高田遺跡』所収・昭和52年)

註7 杉崎章・磯部幸男・山下勝年『下高田遺跡』美浜町教育委員会・昭和52年

註8 山下勝年「相模谷遺跡」(『小原池古窯址群』所収・昭和54年)

註9 『知多市誌本文編』所収・昭和56年

付載1 高ノ御前遺跡第3地点試掘調査報告

1 位置 (図29・30、図版11)

高ノ御前遺跡第3地点は、東海市大田町高ノ御前1番地(C区)、同2番地(D区)と大田町前畑64番地(A・B区)に所在する。

遺跡は、知多半島の骨格をなす知多丘陵にもとを発した支丘の北端上に立地する。本支丘は、名古屋鉄道常滑線太田川駅の東方約1.2km付近を北端として南にのびており、その西方には、中ノ池遺跡でも述べたように半島内で最も広い沖積低地がひろがり、東側は大田川の解析によって丘陵を分けている。

本地点は、第1、第2地点よりも約15m北東に離れた丘陵の先端寄りで、標高が約12m低く、北方にひろがる水田面との比高は約6mである。

2 調査の経過

本遺跡の由来及び第1、第2地点については、杉崎章氏が報告されている(註1)。この時点での調査資料からみた遺跡の年代は、第2地点が縄文時代晩期後葉の元刈谷式の時期、第1地点が晩

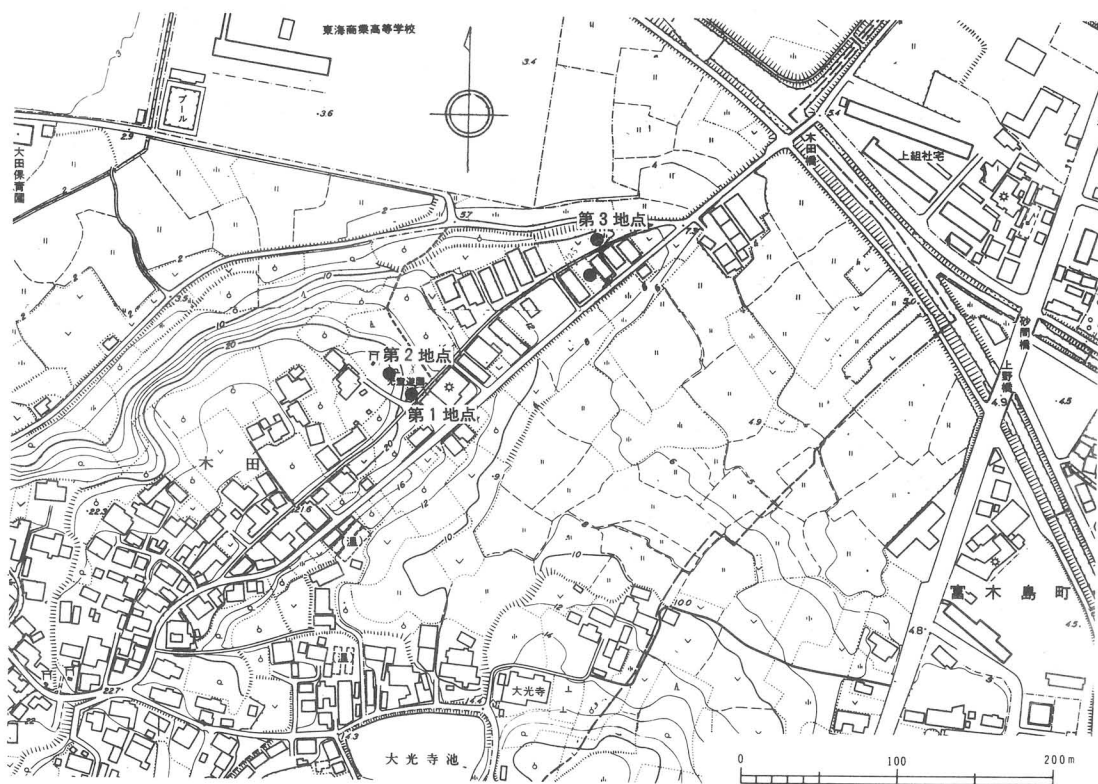


図29 高ノ御前遺跡位置図

期終末期であった。

昭和50年2月に、山口克氏が市立郷土資料館に本遺跡一帯で表採された遺物を寄贈され、その中に、縄文時代前期、中期、後期に編年される土器が認められた。市内では、いまだこの時期に属す遺跡が発見されておらず、遺跡付近も宅地化されてきたので、遺跡の状態を知るため試掘調査を実施した。

調査区域は、先に述べた古い時期に属す資料が多く表採された地点で、そこにA～Cの3つのトレンチを設定して行った。

調査は、昭和50年3月29日、30日の2日間と同年8月25日の延べ3日間にわたり実施した。

調査体制は次のとおりである。

調査主体 東海市教育委員会

調査担当者 杉崎章

調査参加者 池田陸介、石川玉紀、加古重光、堤文二、長谷川昭二、早川信三、深谷伝吉、山口克、都築暢也、市教育委員会職員

3 遺跡の状況

(1) A区 (図31、図版11・16)

A・B区の属す地目は畑地で、縄文土器、弥生土器や山茶碗などの散布がみられる。

A区は北東よりの宅地と畑地の境界法面に貝層があり、この貝層を調査するため2m×1mのトレンチを設定した。

約25cm掘り下げたところで、厚さ約15cmの貝層がみられ、その約5cm下に厚さ約10cmの薄い貝層が認められた。これらの貝層は、アカニシ、カガミガイ、ハマグリ、ツメタガイ、ハイガイの堆積したもので、ハイガイを主体としている。

この貝層からは、縄文時代前期、中期、後期の土器が出土した。この他、石錘、石鏃が各2個出土した。

(2) B区 (図32)

B区においては、径約40cm、深さ約10cmのきわめて小規模の貝層を(図32のP₁)1ヶ所検出した。貝はハイガイを主体としハマグリ、

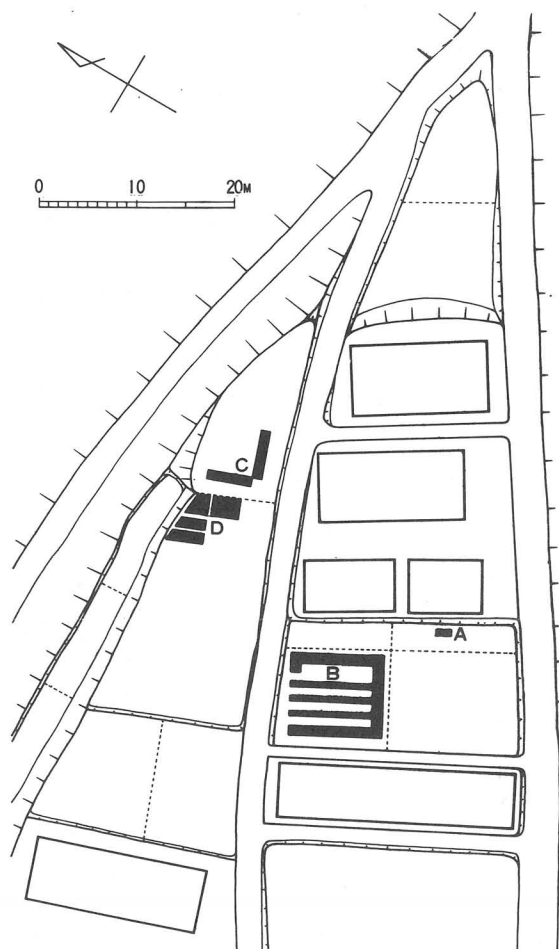


図30 高ノ御前遺跡第3地点調査区図

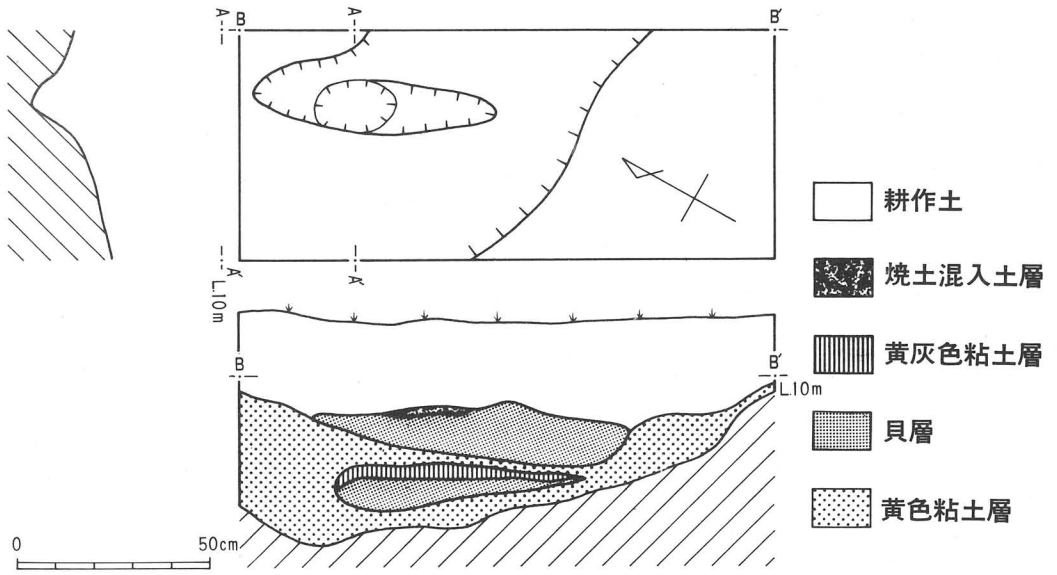


图31 高ノ御前遺跡第3地点A区平面図・断面図

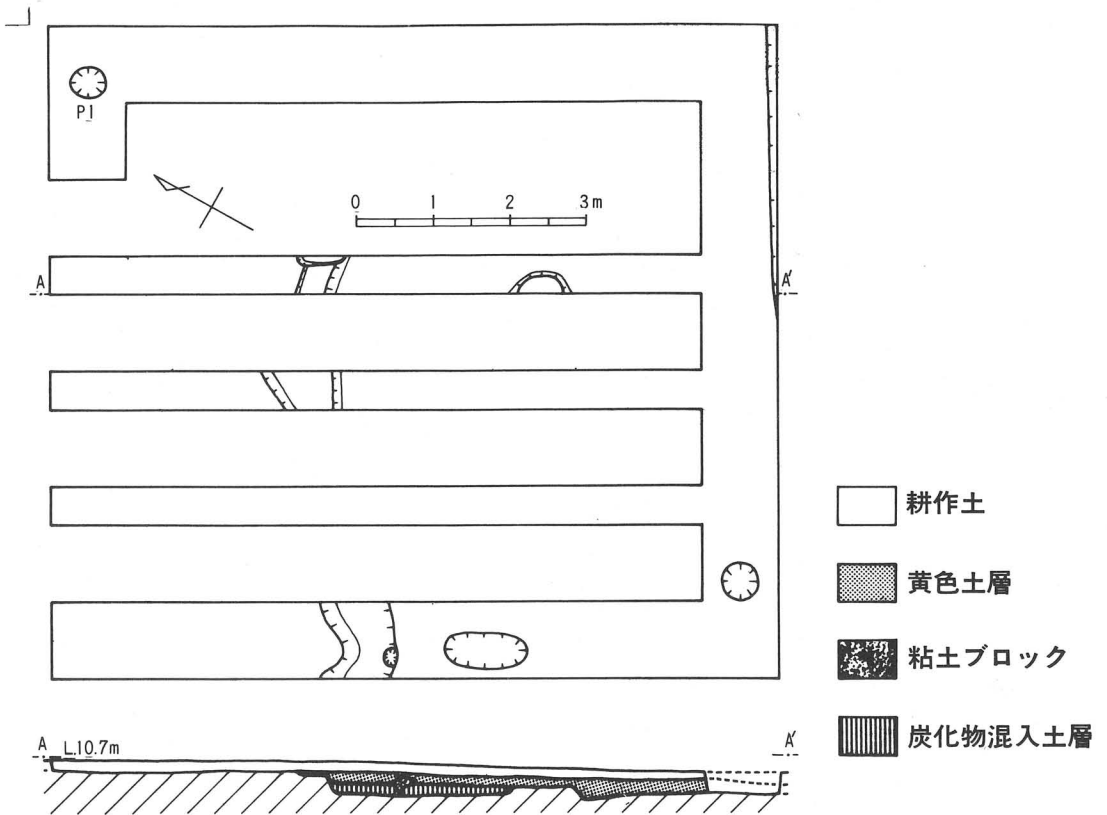


图32 高ノ御前遺跡第3地点B区平面図・断面図

ツメタガイ、アカニシ、カキが堆積していた。中に約4 cmの小礫が多く混入していた。土器は小片が1片出土したのみで、時期は不明である。

この他、小穴や浅い溝を検出した。土器は、弥生時代後期に属す弥生土器が多く出土したが、中に縄文時代中期に属す縄文土器も混在していた。

(3) C区 (図30)

C区の地目は荒地で、ハイガイの散布が最もよくみられる畑地に接した地点である。この貝の散布の多い地点にトレンチを設定する予定であったが、作物を作っているため土地を借用できず、それに接して設定した。

ハイガイの混入した土層がみられるのみで、土器などの遺物は出土しなかった。

(4) D区 (図30)

D区は3月の調査時には作物が作られており、調査できなかった区域で、8月に調査を実施した。

ハイガイを主体とする貝の散布が最も密にみられる場所であるが、出土した遺物はほとんどなく、遺構も認められなかった。

4 遺物

調査で得た資料と表採資料を合わせて記載し、單元ごとにその区分けをする。

(1) 土器

ア 縄文土器 (図33~35、図版12~14)

- A区出土 (図33-8~10、17~19、23、24、26、図34-3、図35-16、21、22)
- B区出土 (図33-9、13、15)
- その他は表採である。

縄文土器は、調査区からの出土遺物及び付近から採集された遺物を合わせてみると、縄文時代の時期区分に即して大きく4群に分けることができる。

(イ) 第1群土器〔縄文時代前期の土器〕 (図33-1~11)

1は縁帯部に爪形文状の刺突文を1段ごとに傾きを逆にして施す。2は押し引き様の連続刺突文をめぐらす。3~5は羽状縄文を施す。6・7は細い粘土紐を貼り付けた浮線文を有する。8は半截竹管により引き出された隆帯によって平行線や斜めに合わさる文様が作り出されている。

(ロ) 第2群土器〔縄文時代中期の土器〕 (図33-12~17)

12は口縁を突帯状に厚く作り、その下段に口縁に沿って「く」字形を呈する連続した刺突文を施す。13・14は波状口縁の波頂部で、13は突起の張り出した部分に円形の刺突がある。15~17は沈線で文様を施している。15は粘土紐の貼付による方形の隆帯が配されている。

(ハ) 第3群土器〔縄文時代後期の土器〕 (図33-18~26、図34-1~4)

18・19は口縁を内湾ぎみに作り、縄文を施している。24・25は沈線でかこんだ内部に縄文を施した磨消縄文土器。26はさまざまに条の異なる縄文を地文として沈線がめぐる。27は8条ほどが1組となった櫛状具によって線描を施す。1~4は沈線を施す。

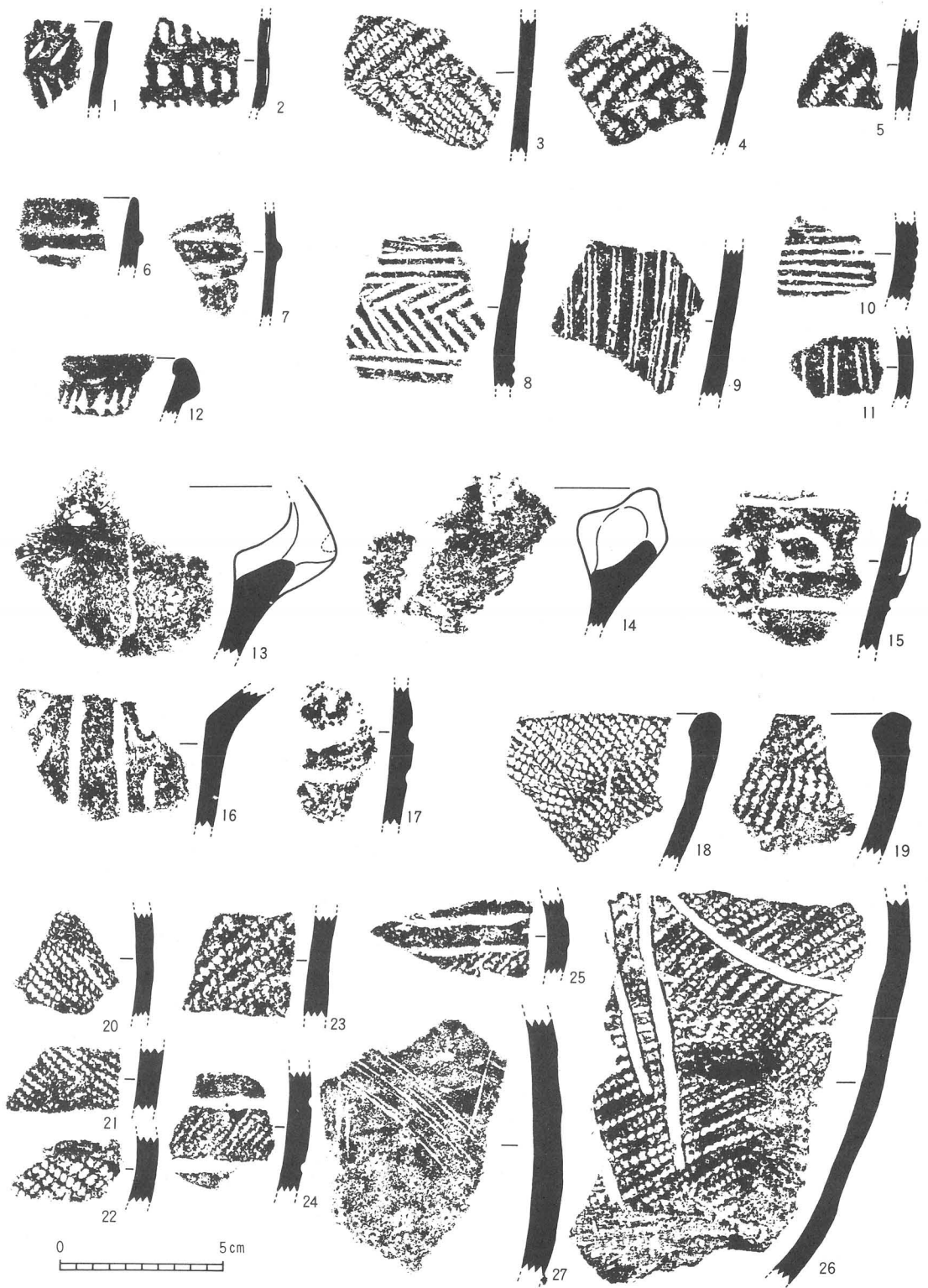


图33 高ノ御前遺跡第3地点・土器拓影1

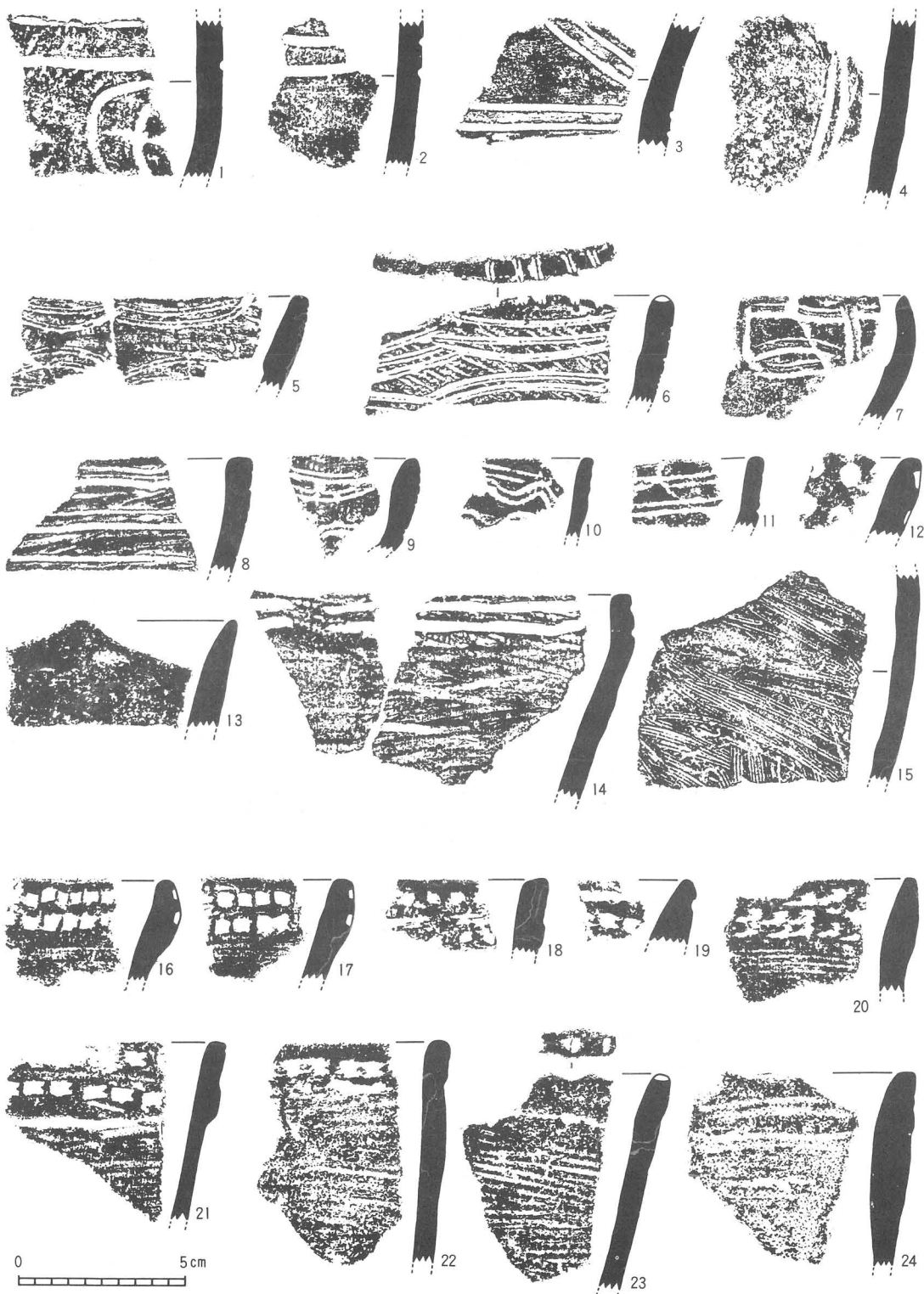


图34 高ノ御前遺跡第3地点・土器拓影2

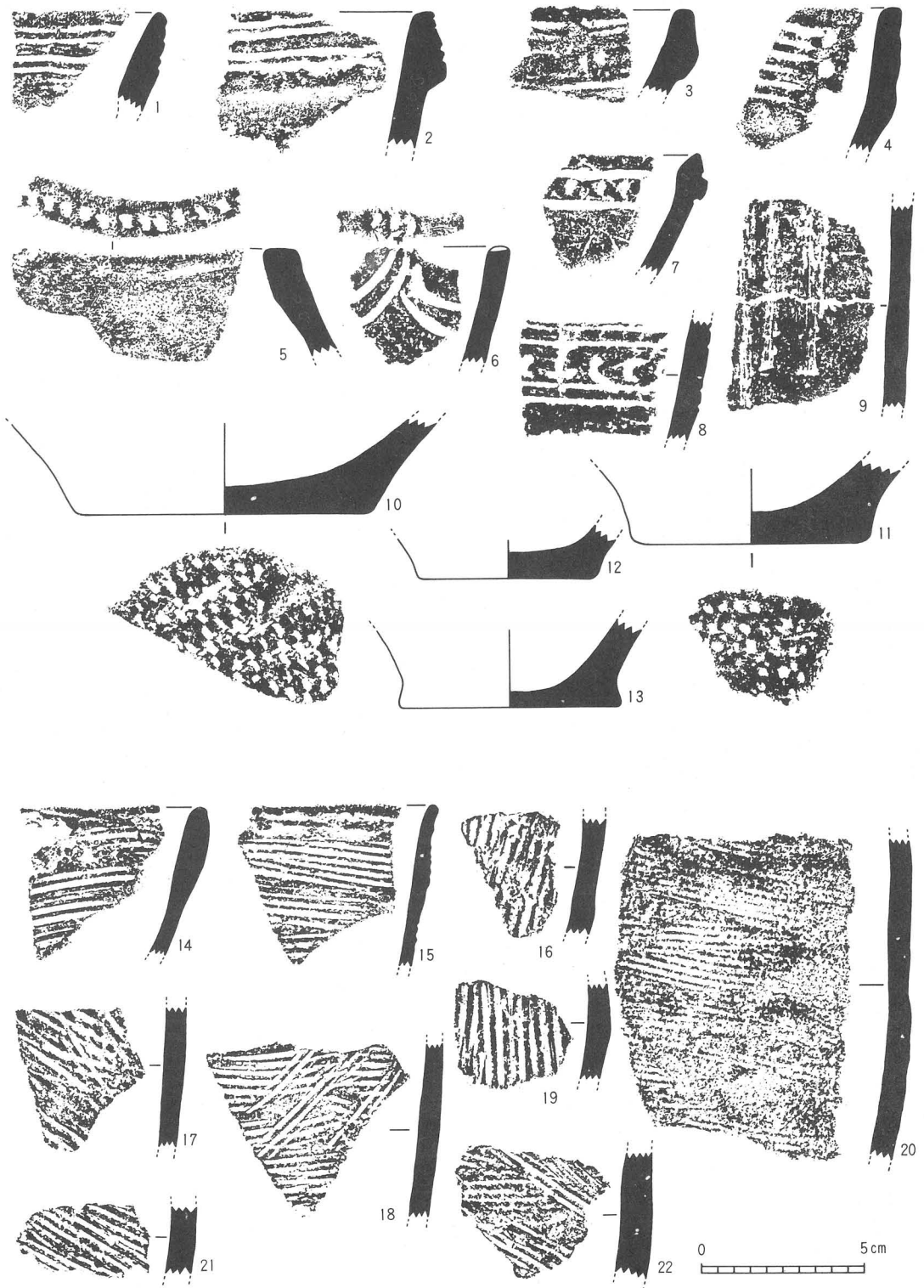


图35 高ノ御前遺跡第3地点・土器拓影3

(エ) 第4群土器〔縄文時代晩期の土器〕(図34-5~24、図35-1~22)

a 第1類(図34-5~15)

縄文または擬縄文地に半截竹管による連弧文状の波文を向い合わせてめぐらしたもの(5・6・9)、素面に平行線や波文をめぐらしたもの(7・8・10・11)がある。12は細巻貝の口部を用いて刺突文をめぐらす。13は無文の波状口縁である。14は器面に条痕とわずかに擬縄文を残し、口縁に沿って2条の沈線をひく。15はウミニナ、ヘナタリ類の細巻貝による条痕を残す。

b 第2類(図34-16~24、図35-1~9)

16~19は2列に連続押引文を加えたもの。20~22は口縁部に1列ないし2列の半截竹管による連続押引文をめぐらす。23は横位の条痕で仕上げ、口唇に圧痕を加える。24・1・2は半截竹管による平行線を施す。3は口唇に圧痕を加える。4は半截竹管による平行線を3条めぐらし、竹管による刺突文を縦に配する。5は口唇に連続刺突文がめぐる。6は波状口縁に沿って2条の沈線を引き、波頂部に圧痕の刻みを加える。7は口縁に沿って隆帯をめぐらし、その上下に沈線を引き、隆帯上に指先によるとみられる刺突文列がめぐる。8は半截竹管による平行線間に連続押引文を加える。9は胴部に縦位の擦痕がみられる。

図35-10~13の底部は第1・2類のものとみられる。10・13は網代の圧痕が、11・12には木の葉の圧痕がみられる。

c 第3類(図35-14~22)

器面を条痕で仕上げたもの。

以上4群に分けた縄文土器は、さらにおおむね9つの時期に分けられる。

第1期は、第1群土器のうち図33-1・2の資料によって示される清水ノ上II式(前期前葉)(註2)の時期である。

第2期は、第1群土器のうち図33-3~5の資料によって示される清水ノ上III式(前期中頃)(註3)の時期である。

第3期は、第1群土器のうち図33-8~11の資料によって示される前期末に比定される時期である。

第4期は、第2群土器のうち図33-12の資料によって示される中期中葉に比定される時期である。

第5期は、第2群土器のうち図33-13~17の資料によって示される中期後半に比定される時期である。

第6期は、第3群土器によって示される後期前葉に比定される時期である。

第7期は、第4群第1類によって示される寺津式(晩期初頭)の時期である。

第8期は、第4群第2類によって示される元刈谷式(晩期前葉)の時期である。

第9期は、第4群第3類によって示される晩期の条痕の伴う時期である。

イ 弥生土器(図36、図版14)

弥生土器は、ほとんどB区から出土した。土器は小破片で、器表面が剥落し遺存状態不良のものが多い。

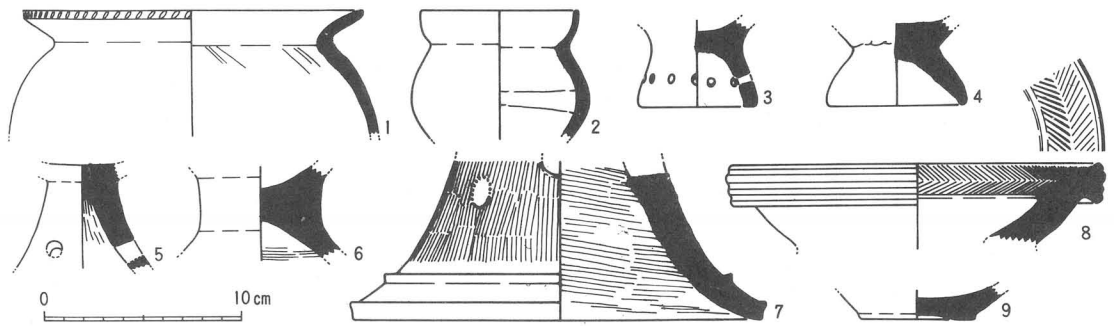


図36 高ノ御前遺跡第3地点・土器実測図

○B区出土（図36-1・2・5・9）

○その他は表採である。

(ア) 甕形土器（図36-1～4）

1は口頸部が外反し、口縁部に刻み目状の圧痕がめぐる。2はやや内湾した口頸部が付く。3・4は台付甕形土器の脚部で、3には12個の円孔列がめぐる。

(イ) 高坏形土器（図36-5・6）

5は円孔を3個穿つ。6は坏部と脚部の接する部分が円柱状に長くのびる。

(ウ) 器台形土器（図36-7）

内外面とも刷毛目がみられ、下方に断面三角形の突帯を付ける。円孔の穿たれたあとが2ヶ所みられるが、破片のため全体にどのような配置になるのか不明である。

(エ) 壺形土器（図36-8・9）

8は口唇部を下方にのばし幅広くし、3条の沈線をめぐらし、内面にへら状器具による羽状の圧痕を施す。

これらの弥生土器は、弥生時代後期に編年される寄道式（図36-3～8）と欠山式（図36-1・2）に属するものとみられる。

(2) 石器・石製品（図37・38、図版15）

○A区出土（図37-5・6・52・53）

○B区出土（図37-8・42・51）

○その他は表採である。

ア 石鏃（図37-1～41）

石鏃は調査で得た3点と、表採資料が141点の合計144点がある。材質は石英安山岩製が多く、チャート製もある。形態は大きく10に分けることができた。以下、形態別に数量の多いものからみてる。

(ア) ほぼ二等辺三角形の基底部にゆるやかな弧状のえぐりがはいるもの34個。大きさから2種類に分けられる。

a 長さ14～17mm、幅11～15mm、厚み2.5～3.5mm、重さ0.3～0.5gのもの8個（図37-1～3）。

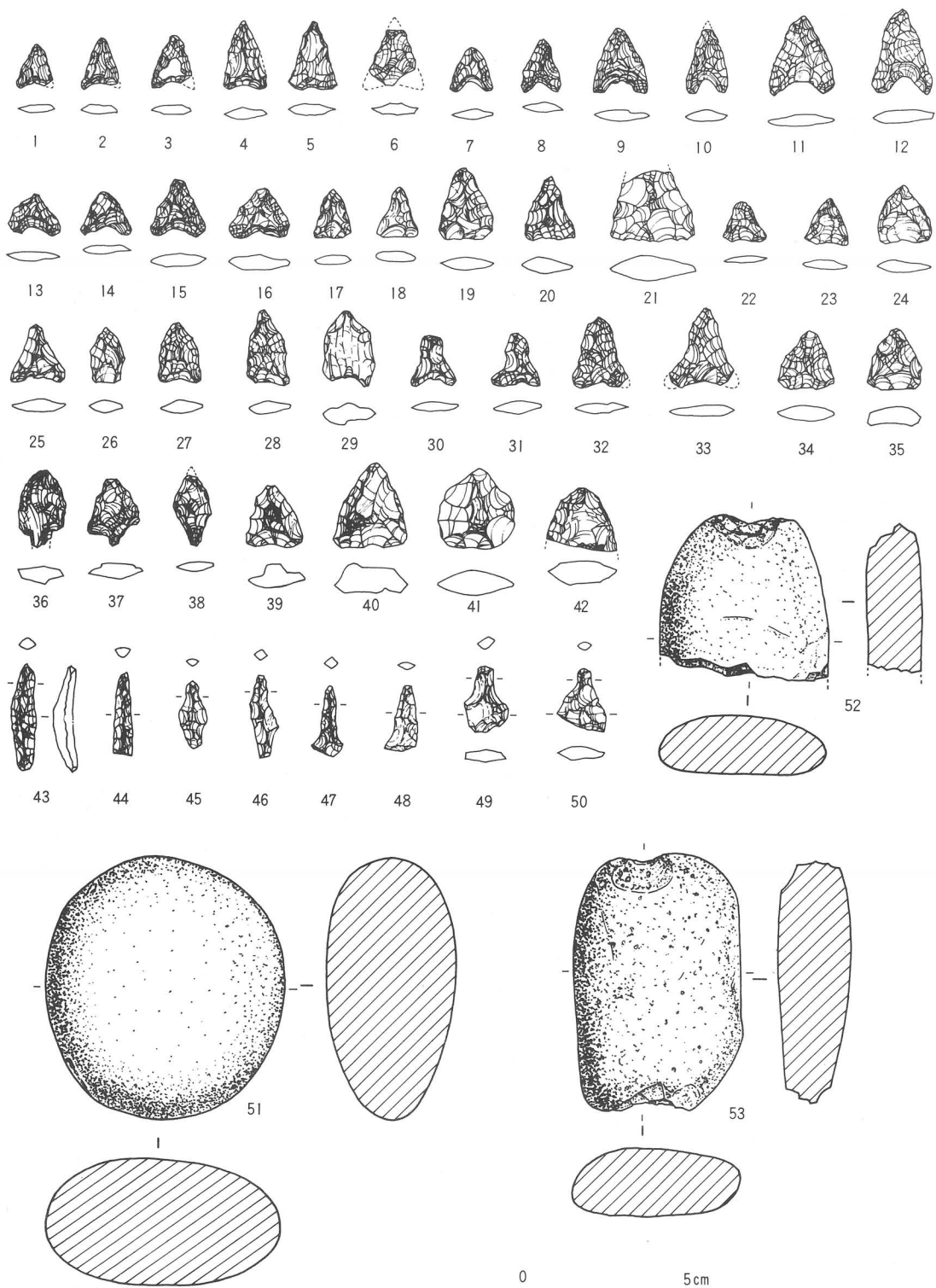


图37 高ノ御前遺跡第3地点・石器実測図1

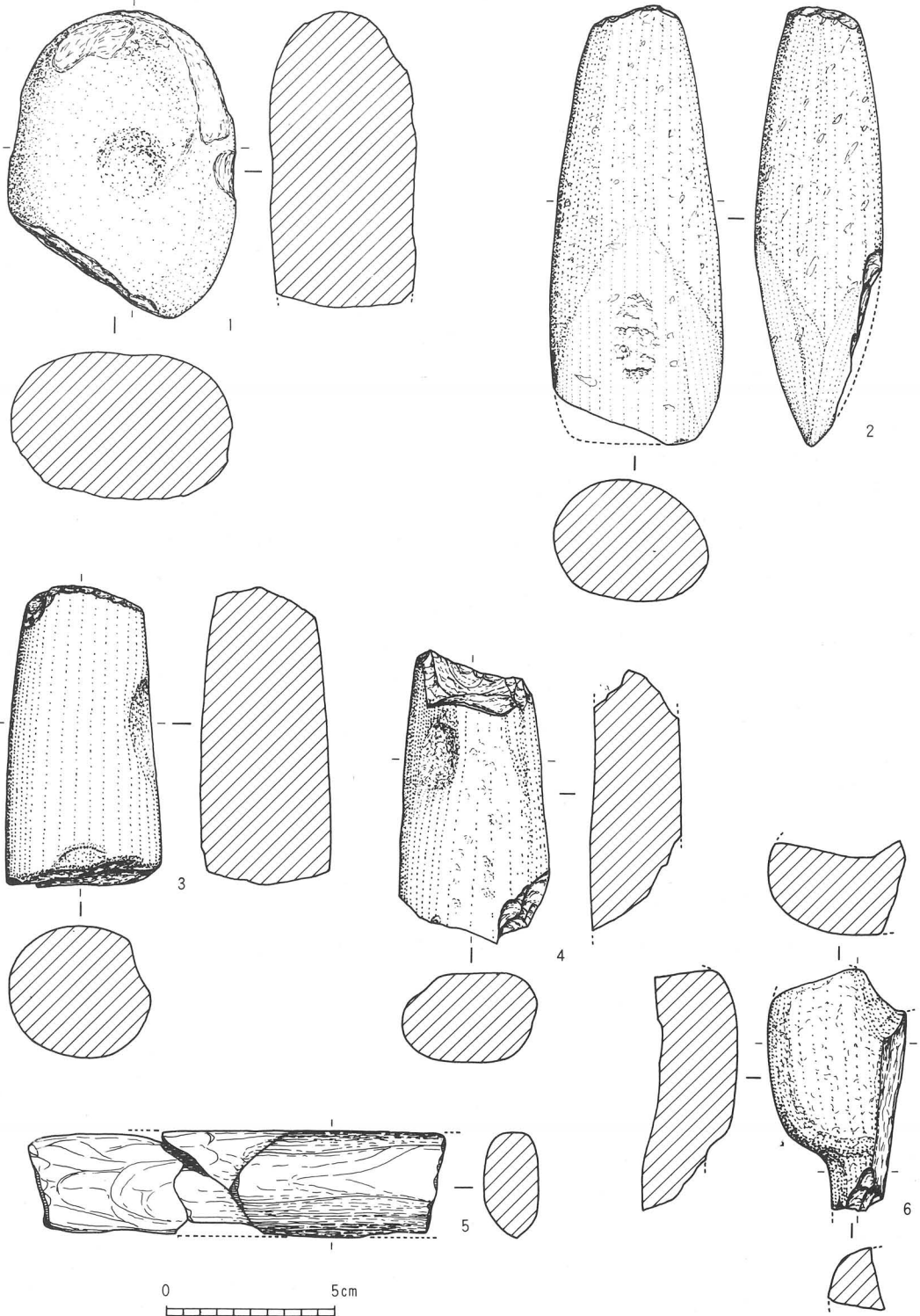


图38 高ノ御前遺跡第3地点・石器実測图2

b 長さ18~22mm、幅14~19mm、厚み3~5mm、重さ0.8~1.1gのもの26個(図37-4~6)。

3の1点のみ押圧剝離による両面加工後、磨いたとみられる平坦な面が認められる。

(イ) (ア)よりも基底部に深いえぐりがあるもの24個。大きさから3種類に分けられる。

a 長さ12~16mm、幅12mm前後、厚み3mm前後、重さ0.3~0.4gのもの2個(図37-7・8)。

b 長さ19~24mm、幅13~19mm、厚み3~5mm、重さ0.6~1.4gのもの18個(図37-9・10)。

c 長さ25mm前後、幅19mm前後、厚み4~5mm、重さ1.8g前後のもの4個(図37-11・12)。

(ウ) ほぼ正三角形の基底部にゆるやかな弧状のえぐりがあるもの20個、大きさから2種類に分けられる。

a 長さ12~14mm、幅14~16mm、厚み3~4mm、重さ0.4g前後のもの5個(図37-13・14)。

b 長さ15~18mm、幅14~17mm、厚み3~5mm、重さ0.6~1.2gのもの15個(図37-15・16)。

(エ) ほぼ二等辺三角形を呈するもの16個。大きさから3種類に分けられる。

a 長さ15mm前後、幅11~16mm、厚み3~4mm、重さ0.6~0.7gのもの7個(図37-17・18)。

b 長さ20~25mm、幅17~19mm、厚み3~6mm、重さ0.8~2.2gのもの8個(図37-19・20)。

c 破損品で長さは不明、幅26mm、厚み8mmの大型のもの1個(図37-21)。

(オ) (ウ)よりも基底部にわずかに弧状のえぐりがあるもの14個。大きさから2種類に分けられる。

a 長さ14mm前後、幅13mm前後、厚み3mm前後、重さ0.5g前後のもの2個(図37-22・23)。

b 長さ17~19mm、幅14~20mm、厚み3~4mm、重さ0.7~1.5gのもの12個(図37-24・25)。

(カ) ほぼ五角形の基底部にゆるやかな弧状のえぐりがあるもの8個。大きさから2種類に分けられる。

a 長さ17mm前後、幅12mm前後、厚み4mm弱、重さ0.7gのもの2個(図37-26・27)。

b 長さ24mm前後、幅17mm前後、厚み4~6mm、重さ1~2gのもの6個(図37-28・29)。

(キ) 先端が三角形で基底部に向い屈折してのび脚が長く張り出すもの8個。大きさから2種類に分けられる。

a 長さ17mm前後、幅14mm前後、厚み3~4mm、重さ0.6gのもの2個(図37-30・31)。

b 長さ21~28mm、幅17~22mm、厚み3~4mm、重さ0.9~1.3gのもの6個(図37-32・33)。

(ク) ほぼ正三角形を呈するもの5個。これらは形を整える程度の粗雑な加工である。長さ18mm前後、幅17~22mm、厚み4~6mm、重さ1.1~1.9g(図37-34・35)。

(ケ) 有茎のもの4個(図37-36~38)。

(コ) 厚みがあり粗い調整のもの11個(図37-39~41)。

イ 石槍(図37-42)

B区出土。チャート製。

ウ 石錐(図37-43~50)

すべて表採資料で11点ある。棒状のものが4点、つまみをもつものが7点である。材質は石鏃と同様である。

エ 磨石(図37-51)

B区出土。砂岩製で重さ320 gである。

オ 石錘（図37-52・53）

扁平な楕円形を呈する礫の長軸の両端を打ち欠き、糸かけを作り出したもの。52は閃緑岩製、53は花崗岩製で重さ130 g。

カ 凹み石（図38-1）

1は砂岩製で1個の凹みがある。なお、長軸の一端が平坦になっており、この面も叩き石として使用されている。

キ 磨製石斧（図38-2～4）

2・3は頭部に打痕をもつ。3・4の側面に1ヶ所ゆるやかに凹んだ部分がある。これは二次的な使用によって生じた打痕とみられる。

ク 石棒（図38-6）

破片で全体の形態を知りえないが、大きくふくらんだ部分の頂部にえぐりがは入り、「Y」字状を呈するようである。

ケ 石刀（図38-5）

断面が扁平な棒状のもので、長軸の片方の側面は丸味をもち、他の一方は三角形状にとがっている。

(3) 自然遺物（図版16）

ア 貝類

(ア) A区 A区の貝層には、アカニシ、カガミガイ、ハマグリ、ハイガイ、ツメタガイが堆積していた。

(イ) B区 B区の貝層には、ハイガイ、ハマグリ、カキ、アカニシ、ツメタガイが堆積していた。なお、表採資料中にウミニナもみられる。

イ 魚類

A区貝層中から、魚類の脊椎骨が1個出土した。なお、表採資料中にマダいの顎骨が1個みられる。

ウ 動物類

A区貝層中から、ニホンジカの骨と歯が出土した。

5 まとめ

高ノ御前遺跡第3地点のうちA・B区は、字名が前畑であり、前畑遺跡として報知されている地点（註4）であるが、縄文時代の遺跡として知られる高ノ御前遺跡の区域に包括し「第3地点」として報告しておく。

本遺跡は、今回の調査と表採資料により、今まで知られていた縄文時代晩期よりも古く、縄文時代前期までさかのぼることが明らかにされた。

縄文時代前期前葉から空白の時期をおきつつも、前期中葉、前期末、中期中葉、中期後半、後期

前葉、晩期に編年される土器をみることができる。

註1 参考文献2の28～31頁。

註2 参考文献5の66～70頁。

註3 参考文献6、参考文献7の177、180頁。

註4 文化庁文化財保護部編集、1975：「全国遺跡地図23愛知県」。国土地理協会。

参考文献

- 1 鎌木義昌編、1965：「日本の考古学II縄文時代」。河出書房新社。
- 2 杉崎 章、1971：東海市高御前遺跡。杉崎章ほか「柳が坪遺跡」。東海市教育委員会。
- 3 久永春男・鈴木 尚ほか、1972：「伊川津貝塚」。愛知県渥美郡渥美町教育委員会。
- 4 紅村 弘・増子康真・山口 克、1975：「東海先史文化の諸段階」。
- 5 杉崎 章・磯部幸男・山下勝年、1976：「愛知県知多郡南知多町清水ノ上貝塚・南知多町文化財調査報告書第一集」。南知多町教育委員会。
- 6 増子康真、1976：名古屋市鳴海町銚ノ木貝塚の研究——縄文前期前半土器群の編年を中心として——。名古屋考古学会「古代人第32号」。1～30頁。
- 7 紅村 弘・増子康真・山口 克、1977：「東海先史文化の諸段階（資料編I）」。
- 8 紅村 弘・増子康真・山口 克、1978：「東海先史文化の諸段階（資料編II）」。

付載2 岩屋口古墳調査報告

1 古墳の位置 (図39)

名鉄電車河和線が基点の太田川駅を出て南下し、次の高横須賀駅を過ぎて緩やかにカーブするあたりの東側丘陵上に団地が広がる。岩屋口古墳は、この団地の南側の丘陵斜面に開口している。地籍は、東海市高横須賀町岩屋口4番地にあたる。

本古墳の占地する丘陵は、知多半島の根幹をなす知多丘陵から、大田川によって解析されて北方に延びる形で小支丘を形成しており、海岸に向う西側はさらに小さな侵蝕谷が細かく丘陵を刻んでいる。本墳は、それらのほぼ中程にある小支丘上に単独で位置し、標高は約31mで、西側に開けた海岸平地との比高は約23mを測る。

2 調査の経過

岩屋口古墳は、俗に「岩屋の口」ともいわれ、その位置する字名の由来にもなっている。また、「うなり石」とか「夜なき石」などといわれ、人のうめき声が聞こえるという言い伝えもある。これらのことからみて、古くから開口していたものと考えられる。

昭和31年、当時の横須賀町史編纂委員会の手により、石室内の調査(註1)が行なわれているが、今回 - 石室の実測図を作成するため再度石室内の清掃を行なった。この20年間に流土が50cm程堆積していた。これらを排土の後、新たな資料も得ることができたので、31年当時の資料とあわせて報告する次第である。

調査は、昭和53年3月23日から3月31日までのうちで実働7日を要して終了した。

調査体制は次のとおりである。

調査主体 東海市教育委員会

調査担当者 杉崎章

調査参加者 池田陸介、長谷川昭二、石川玉紀、加古兼敬、市教育委員会職員

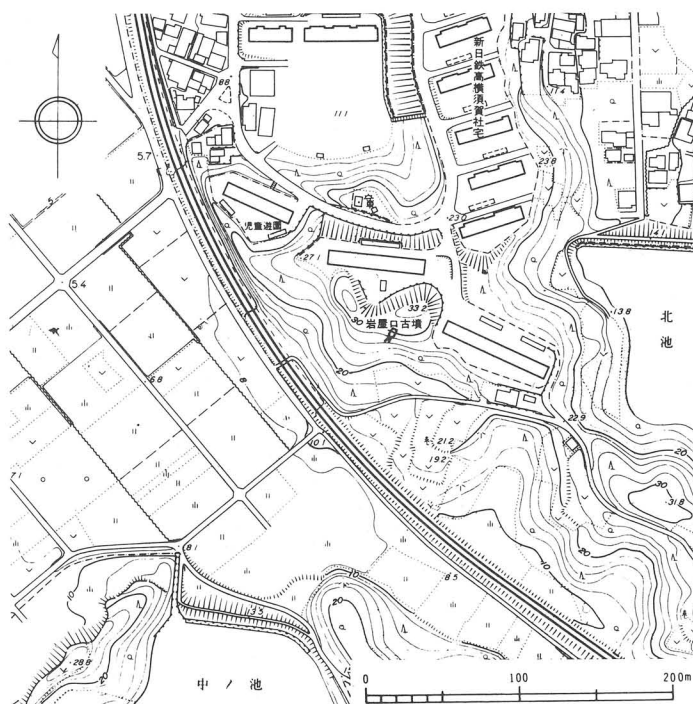


図39 岩屋口古墳位置図

3 石室の調査

(1) 墳丘

本墳は、丘陵頂部から南へやや傾斜した地点に築かれている。墳形は、周囲一帯が往時の開墾や団地の造成等によって変えられており、現在の外観からでは把握できない。おそらく規模の小さな円墳とみられる。

(2) 石室の構造（図40、図版17）

本墳の埋葬施設は、大きな石材を用いて築かれた横穴式石室である。石室は両袖式で、主軸をN-28°-Eに置き、真南より西に偏して開口する。

石室自体の遺存状態は、奥壁寄りの天井石が2枚残存していることから、奥壁寄りほどよく、入口に向うにしたがい壁の基部の石が残るのみである。

規模は、玄室長 3.8m、奥壁幅 1.7m、玄門幅 1.7m、最大幅は中程で 1.8m、袖部左25cm、同右30cm、高さ 2.1m、羨道の残存長 4.6m、幅 1.5mを測る。

構築についてみると、奥壁には、床面からの高さ約 1.6mにおよぶ大きな石を使用し、その上に高さ約50cmの石が重ねられ、持ち送り状に傾斜している。そして、各石材間に小石を詰めて、空き間をうめている。玄室の側壁の石材は、大ぶりな石を使用し、空き間に10cm～20cmの割り石や自然礫を詰めて、4段から5段に積み上げている。また、持ち送りの手法がみられ、天井部の幅は 1.1mと、床面に比べ60cmせばまっている。羨道の側壁も玄室同様大ぶりな石を使用している。床面には、7cm×15cm大の丸い河原石が、玄室全面と羨道の一部に敷かれている。敷石が奥壁寄りの一部にないところもみられるが、排土中に敷石とみられる礫が混じっていることからみて、当初は全面に敷かれていたものが、後世にめくり取られたものであろう。

この他、石室開口部の付近に側壁に使用されていたとみられる石材が、4個点在している。

なお、本墳の天井石数個が明治期に取りはずされ、石碑として利用されている。

(3) 遺物の出土状態

本墳は、相当古くから開口していたものとみられ、石室内に遺物が散乱し、副葬された原位置を保っているものはほとんどないといった状態である。ただ、玄室の奥壁北側角から出土した土師器の碗（図41-1）と、玄室内西側角から出土した須恵器の高坏（図41-2）は、敷石にはまり込んだ状態で出土しており、周囲に堆積した流土もいまだ触れられた様子もなく、副葬された原位置を保っているとも考えられる。

この他の遺物の出土した位置を、一応、記載しておく。玄室の入口中央付近から須恵器長頸壺（図41-3）が出土し、これと同一個体の破片が玄室の奥壁近くの東端からも出土した。玄室内の玄門寄りの西壁側から山茶碗（図41-10）と須恵器大甕（図41-5）が出土した。その反対側の東壁寄りから、甗（図41-6）が出土している。玄室中央部から灰釉陶器碗（図41-8）が出土し、そのやや南寄りから須恵器水瓶（図41-7）が出土している。玄室中央部の東壁寄りから鉄器片が出土し、同壁の奥壁寄りから須恵器長頸壺（図41-4）及び鉄器片が出土した。この長頸壺の破片は、反対側の西壁寄りにも認められた。この他、須恵器大甕の破片（2個体分とみられる）が、玄室内全体に散乱していた。

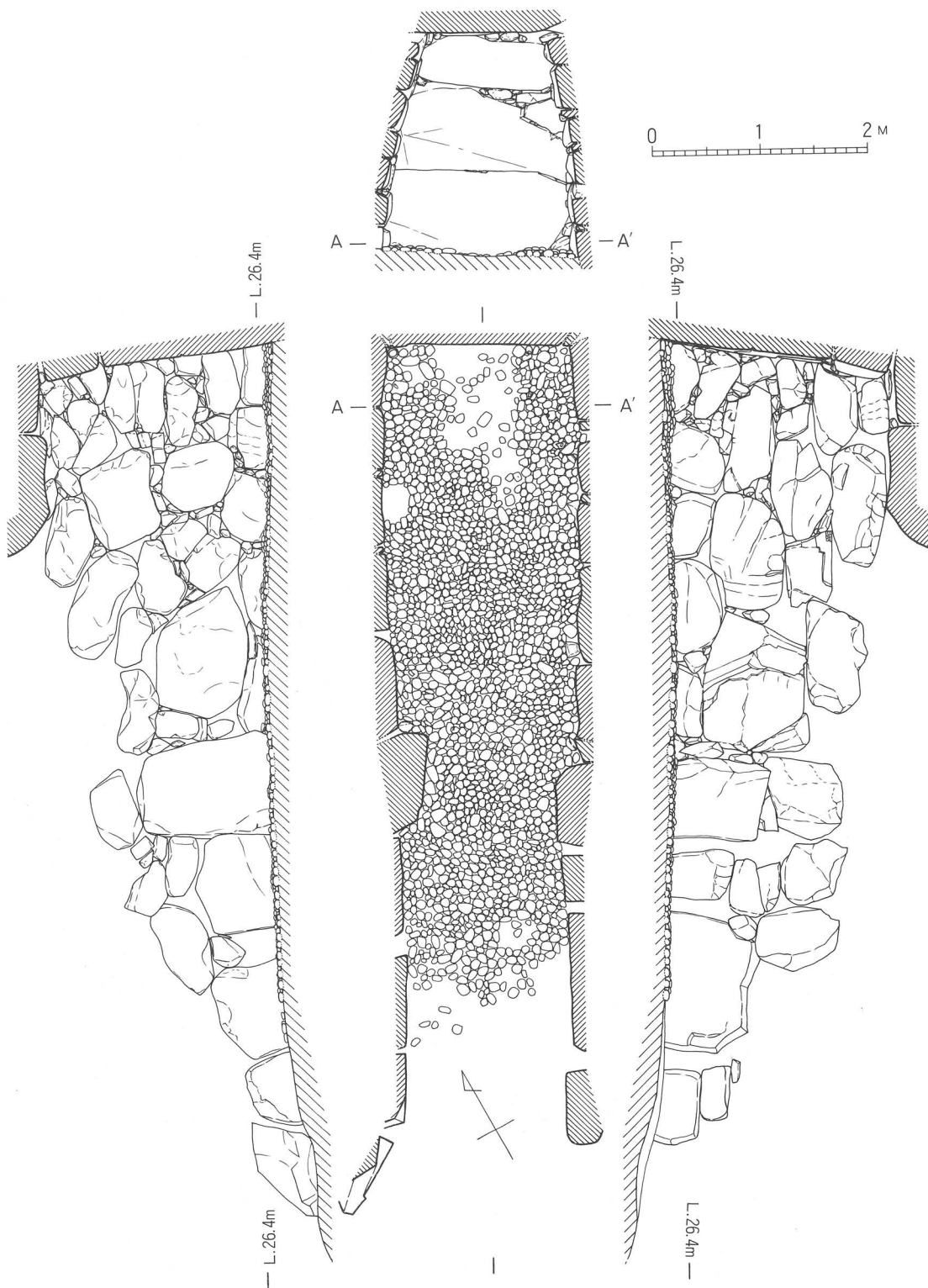


图40 岩屋口古墳石室実測図

昭和31年（1956年）の調査時に出土した遺物についてみると、山茶碗（図41-9）が羨道奥寄りの西壁付近から出土したといわれ、その他は正確な出土場所が不明である。刀子等の鉄器類は、玄室内からの出土品である。この他、前述した長頸壺（図41-3・4）、大甕（図41-5）、甕（図41-6）、山茶碗（図41-10）の破片や、輪花様のおりこみをもつ山茶碗、土師器系の鏝付の釜などがみられる。

(4) 遺物（図版18・19）

ア 土器類

㊦ 土師器碗（図41-1）

口径10.3cm、器高 5.3cm、底径 2.4cmを測る。口縁部を一部欠損している。淡褐色の薄手のもろい土器である。

㊧ 須恵器無蓋高坏（図41-2）

口径11.5cm、器高 8 cm、脚台径 9.1cmを測る。暗灰色を呈し、坏部が片口状に垂んでいる。坏部の外側に横線を 1 条めぐらし、下方にへら削りの跡が残る。

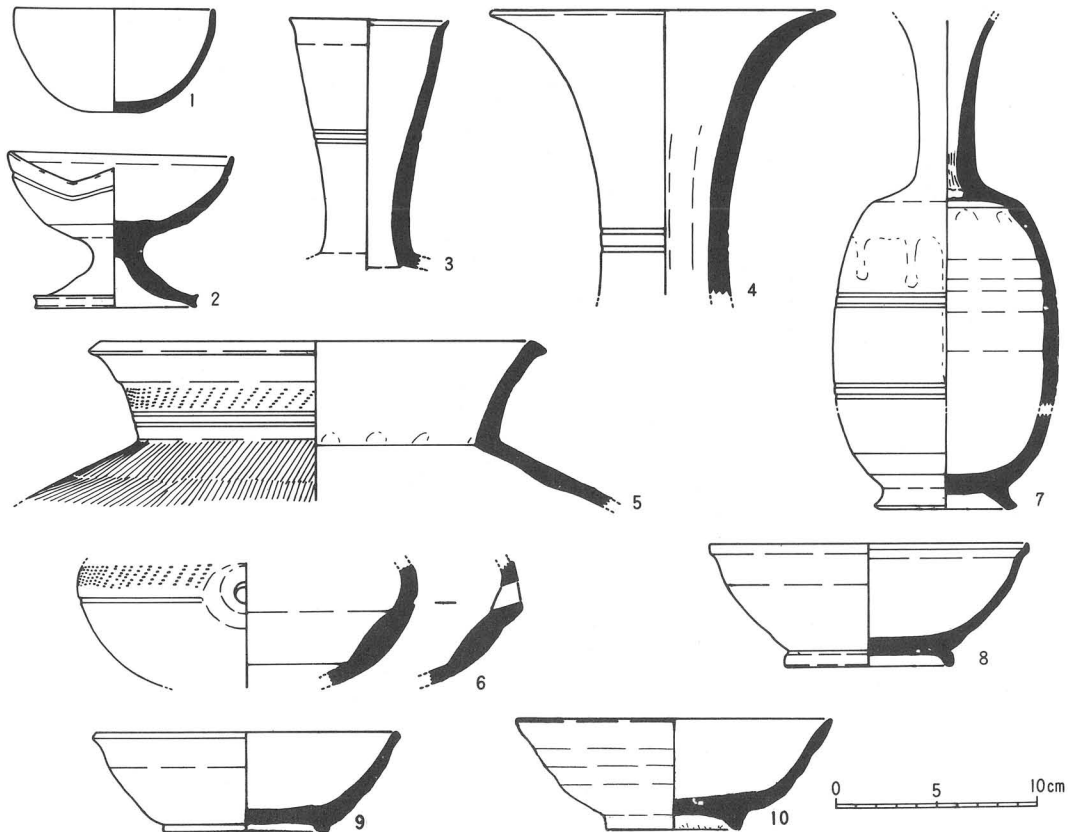


図41 岩屋口古墳出土遺物実測図 1

(ウ) 須恵器長頸壺 (図41-3)

口径8cmを測る。口頸部は付け根からわずかに外方に開き、口縁端部の内側に斜めの平坦面を有し、口端は鋭い。2条の横線が頸部の中程にめぐる。

(エ) 須恵器長頸壺 (図41-4)

口縁部がゆるやかに外反し、口端は丸味をもつ。頸部に2条の横線がめぐる。暗緑色の自然釉が内外面ともに被っている。

(オ) 須恵器大甕 (図41-5)

外へ開く短い口頸部をもつ大形の甕である。口縁端部の断面は丸味をもった三角形を呈し、頸部中程に段を有し、下方の2条の横線は浅く不明瞭である。横線と段の間を斜行点列文で埋めている。胴部器面は全体に叩き目を有し、口頸部内面と同様の暗緑色の自然釉が被っている。

(カ) 須恵器甕 (図41-6)

胴部の注口の周囲は、上向きにわずかに突出せしめられている。1条の横線に沿って斜行点列文もみられる。

(キ) 須恵器水瓶 (図41-7)

胴、肩、口頸部の三段に成形されている。胴部に2条1組の横線が2組入り、高さ1cm程の高台を付けている。

(ク) 灰釉陶器碗 (図41-8)

口縁部が受口状に屈曲する。糸切底で高台を付ける。

(ケ) 山茶碗 (図41-9・10)

9は口径15.2cm、器高5.1cm、底径8.4cmを測る。灰白色を呈する軟質のもので、口端が角ばり、胴部はやや張りをもつ。高台は鈍重な三角の付け高台で低い。

10は口径16cm、器高5.7cm、底径7cmを測る。胴部が直線的に口縁に向い、口端は丸味をもつ。外面にロクロ引きの線条が明瞭に残っている。高台は丸味をもった三角の付け高台で、靱痕がみられる。

イ 鉄器類 (図版19)

(ア) 刀子 (図42-1)

刃部の破片で、現存長7cm、刃幅2cm、厚さ0.6cmを測る。

(イ) 鉄釘 (図42-2・3)

2は幅1.2cm、厚さ2mm程の扁平な板状の端を折り曲げた形態のもので、その突出する長さは約4mmを測る。

3は径1.1cm、厚さ2mm程の円板を頭部にもち、身の断面はやや角ばり5mmを測り、先端に向い細くなっている。

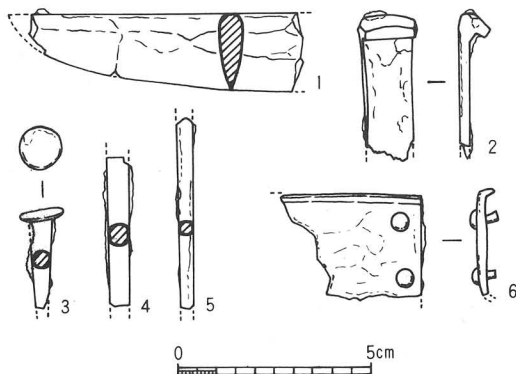


図42 岩屋口古墳出土遺物実測図

(ウ) 鉄鏃 (図42-4・5)

共に篋被 (のかずき) の破片とみられる。4の断面は、錆ぶくれで明瞭ではないが、方形をなすものとみられる。

5の断面は、4mm程の方形をなすものとみられる。

(エ) 馬具 (図42-6)

銚留が2ヶ所みられ、端を折り曲げた平板で、厚さは1.5mm、折り曲げられた部分の長さは約2mmを測る。銚の径は5mmで、2個対に打たれ、地金の鉄とは異なる材質で光沢をもっている。おそらく銅製とみられるが、茎の部分は鉄製のものである。銚の長さは7mmを測る。馬具に伴う帯金具とみられる。

(オ) その他

錆ぶくれで全く用途の不明な鉄片が、2個出土している。

4 まとめ

本墳は、相当古くから開口していたようである。石室内から出土した山茶碗などからみても、鎌倉時代の初期には何らかのかたちで再利用されていたとみられる。

石室から出土した遺物をもとに、量的に少なく、年代的にもかなりの幅をもっている。これらのうち、供献されたとみられる容器類についてみると、土師器碗 (図41-1)、須恵器無蓋高坏 (図41-2)、須恵器長頸壺 (図41-3)、須恵器甕 (図41-5) が時期的に一つのまとまりを示すものとしてとらえられ、須恵器長頸壺 (図41-4) はそれより新しい時期のものである。これらの時期は、須恵器の編年等から勘案して、はじめのものが7世紀の中頃から後半にかけて、次のものが8世紀初頭頃の年代が与えられると思われる。

次に、古墳の営造年代についてみると、先に述べた須恵器類のうち最も古い時期のものが、石室の様相からみてそのまま営造年代と一致するとはみられない。古墳の変遷上の位置付けと形態的観点からみて、奥壁に巨石を用い、整った両袖式石室をもつことから、遅くとも後期・II期 (6世紀末から7世紀初頭) (註2) あたりには、営造されたと考えられよう。とすれば、前述した須恵器類の時期は追葬のあった時期としてとらえられよう。

この他、釘の存在から木棺が納められていたとみられる。

註1 杉崎 章、1969：横須賀町のおいたち、先史・原始時代。横須賀町史編集委員会編「横須賀町史」。42～44頁。愛知県東海市。

註2 大塚初重、1966：古墳の変遷。近藤義郎・藤沢長治編「日本の考古学IV古墳時代(上)」。39～100頁。東京・河出書房新社。

図版1 中ノ池遺跡群C地点遠望・焼土壌



B地点からみたC地点遠望



C地点 焼土壌

図版2 中ノ池遺跡群B地点遠望・1号竪穴

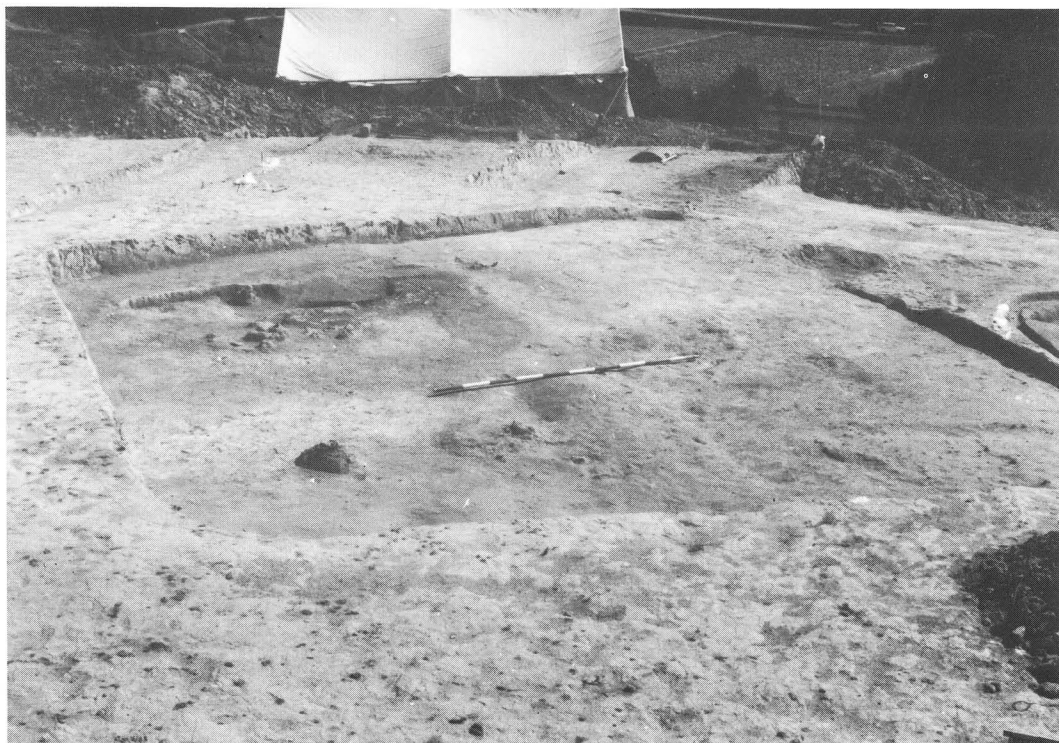


B地点遠望



1号竪穴

図版3 中ノ池遺跡群B地点・2号竪穴

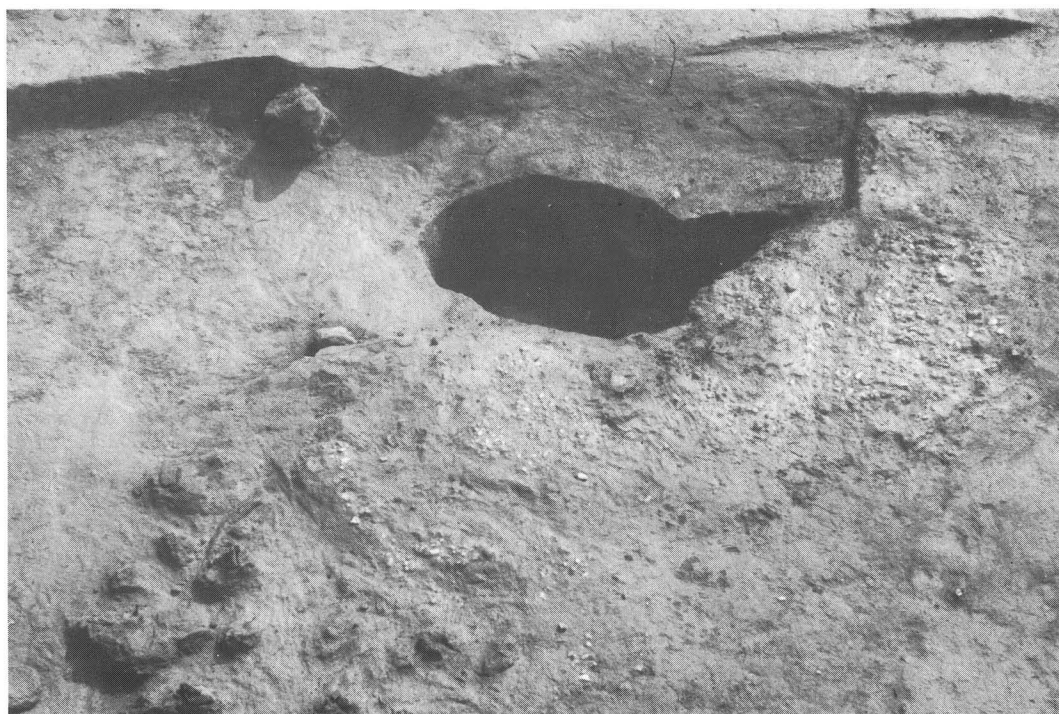


2号竪穴

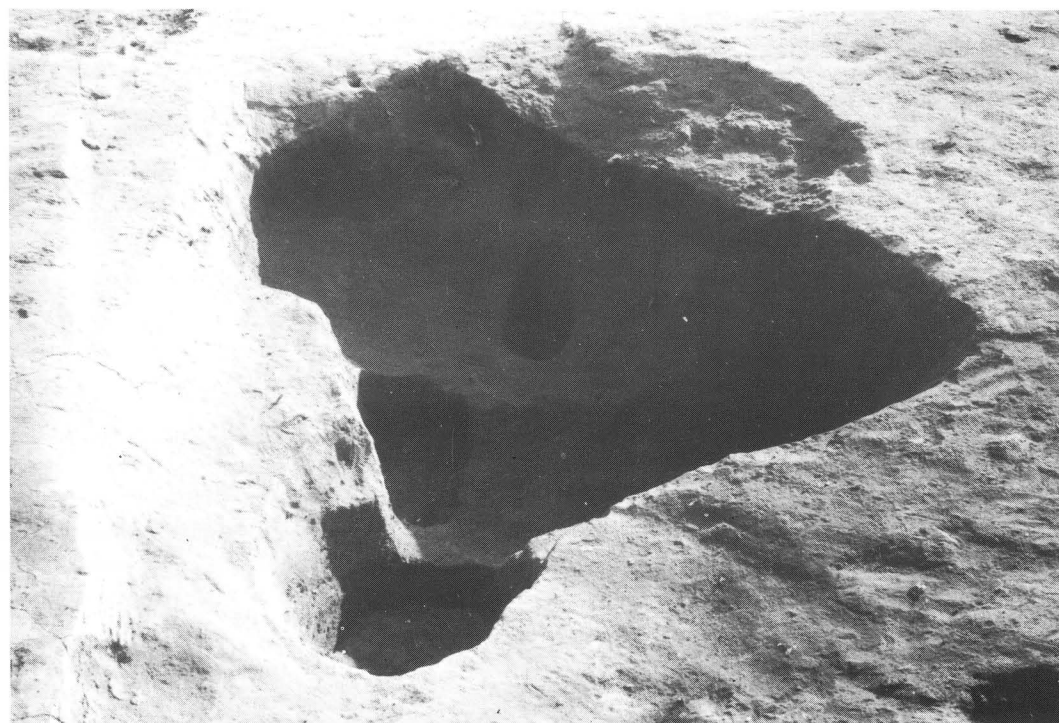


2号竪穴

図版4 中ノ池遺跡群B地点2号竪穴内土壌

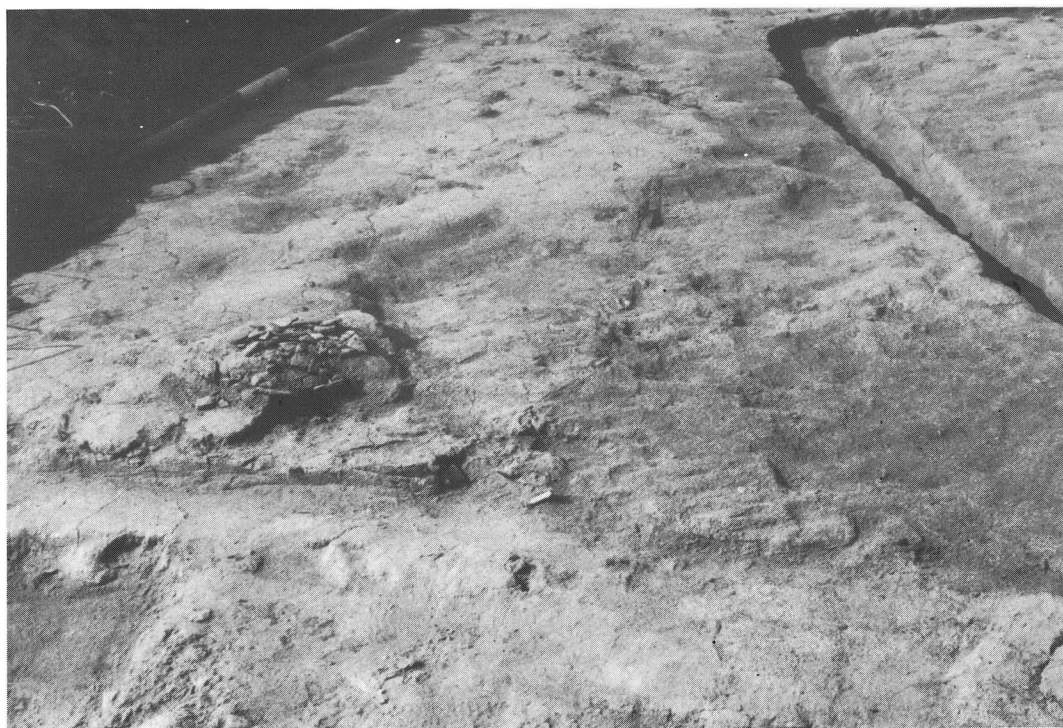


土壌上礫層の分布状態



礫層排土後の状態

図版5 中ノ池遺跡B地点3号竖穴・5号竖穴



3号竖穴



5号竖穴

図版6 中ノ池遺跡群B地点・4号竪穴



4号竪穴



4号竪穴（貯蔵穴）

図版7 中ノ池遺跡群B地点6号竖穴・7号竖穴



6号竖穴



7号竖穴

図版8 中ノ池遺跡群B地点 1号竪穴～4号竪穴

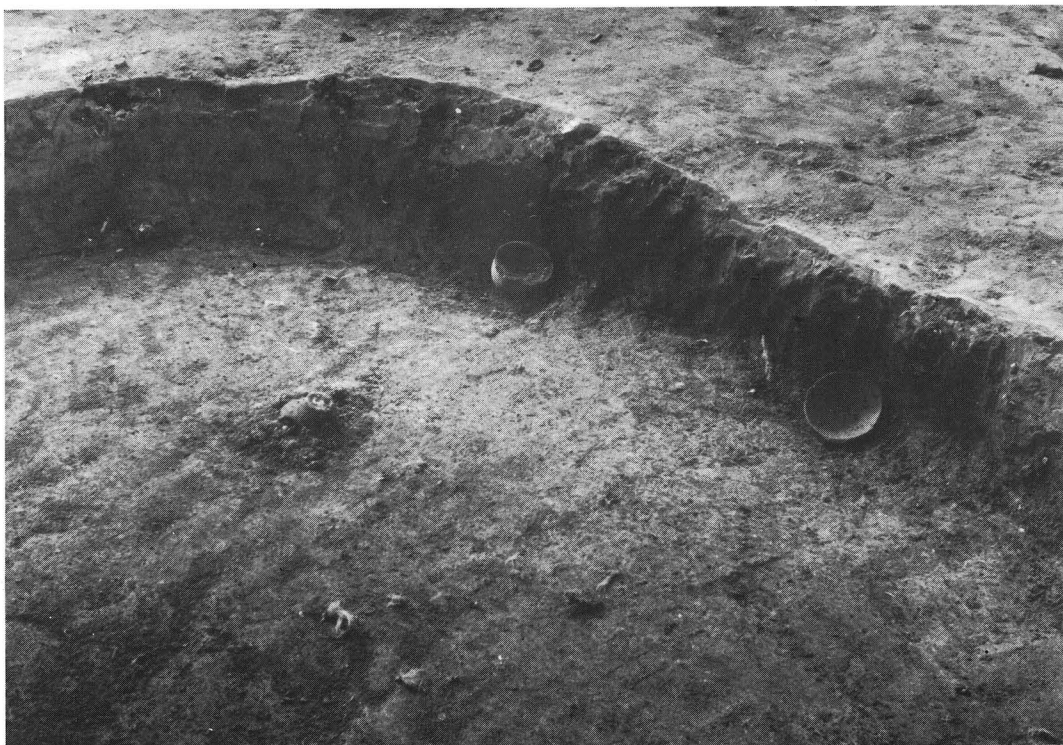


2号竪穴方向からみた4号竪穴



4号竪穴方向からみた1号竪穴～3号竪穴

图版9 中ノ池遺跡群B地点7号竖穴・B地点出土石器



7号竖穴土器出土状态



B地点出土石器

图版10 中ノ池遺跡群B地点各竖穴出土土器



图15-1



图15-3



图24-1



图18-8

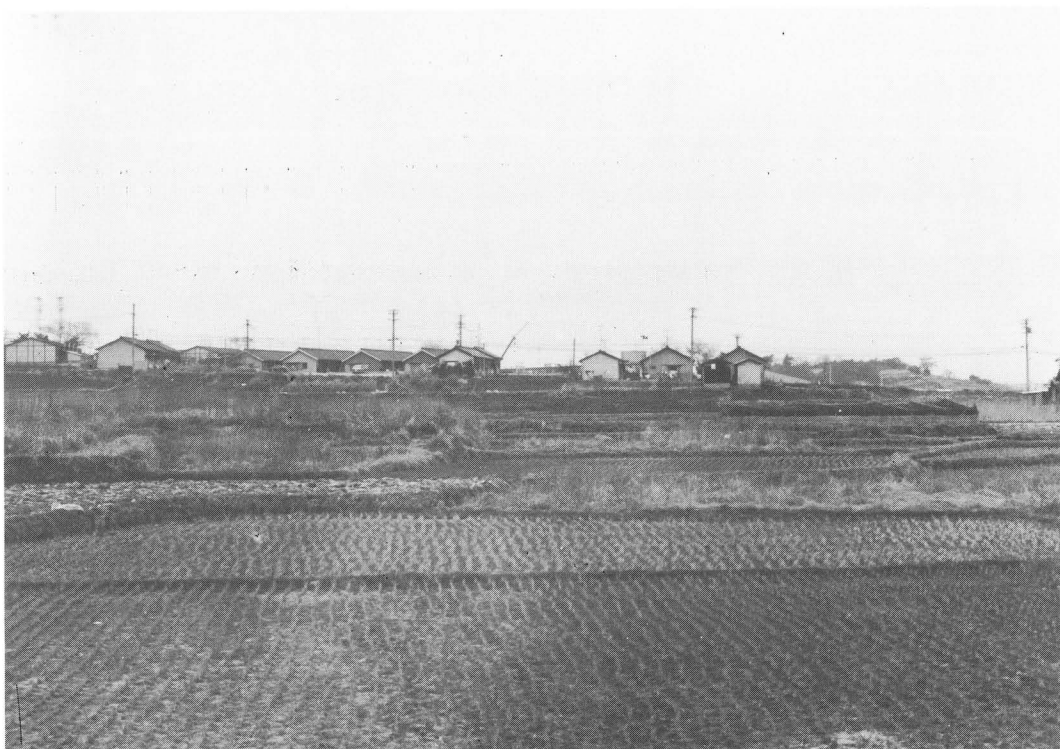


图26-2

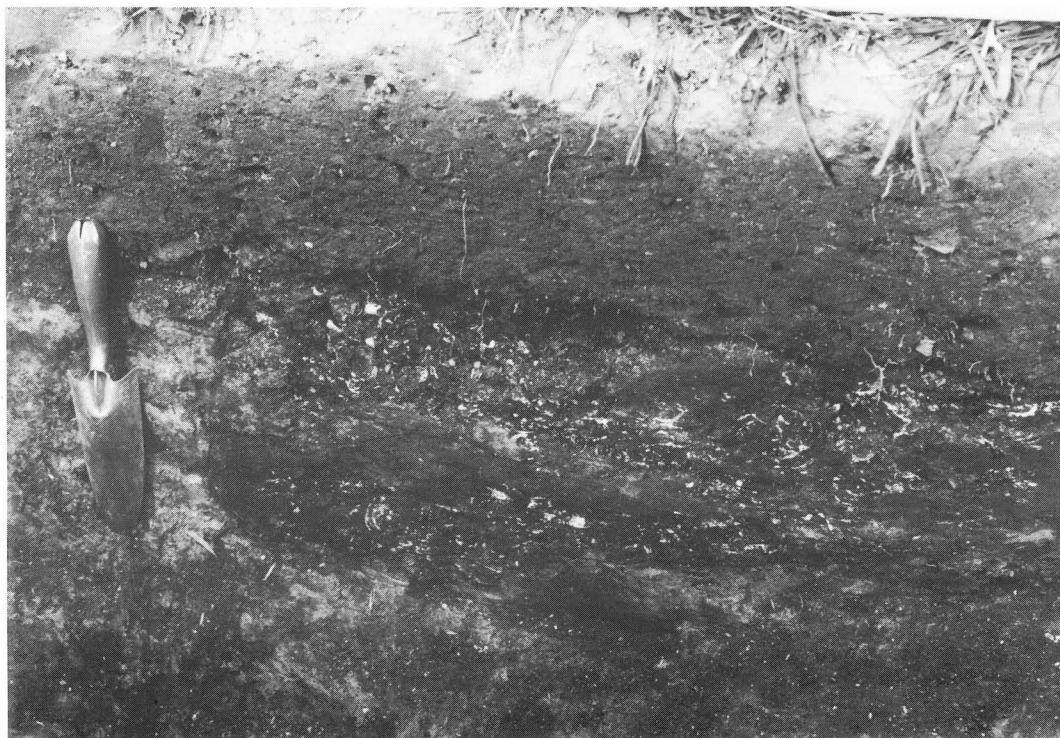


图26-1

図版11 高ノ御前遺跡第3地点遠望・A区貝層

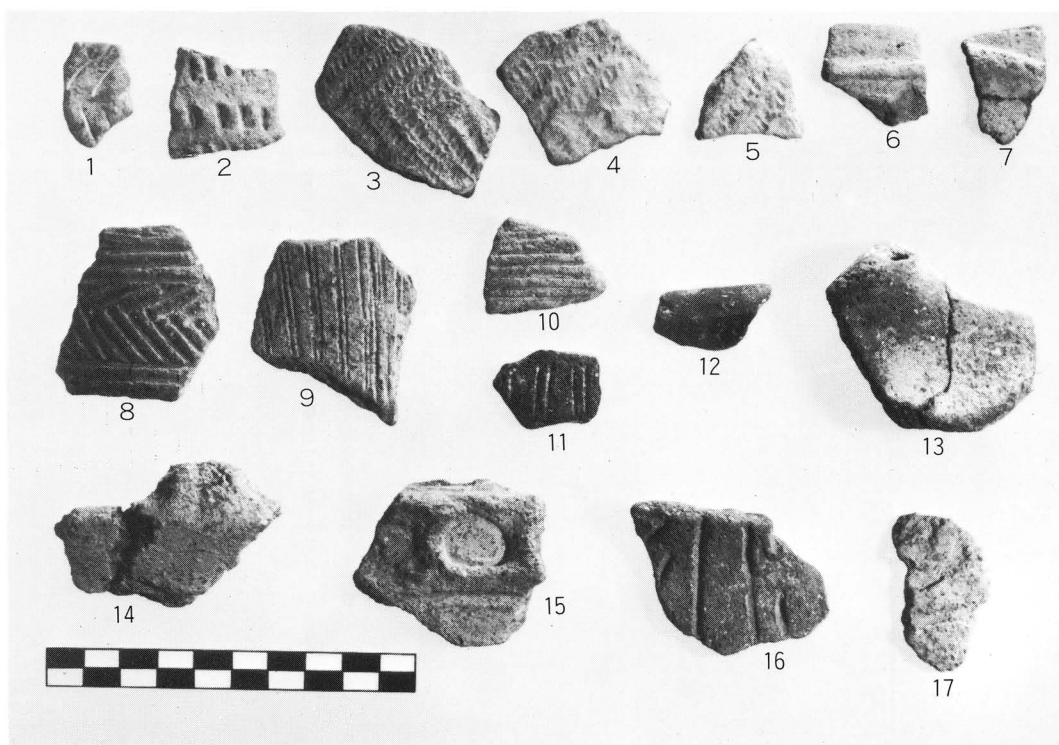


第3地点遠景（右から3軒目と4軒目の間がA区・B区設定区域）



A区貝層断面

図版12 高ノ御前遺跡第3地点・土器1

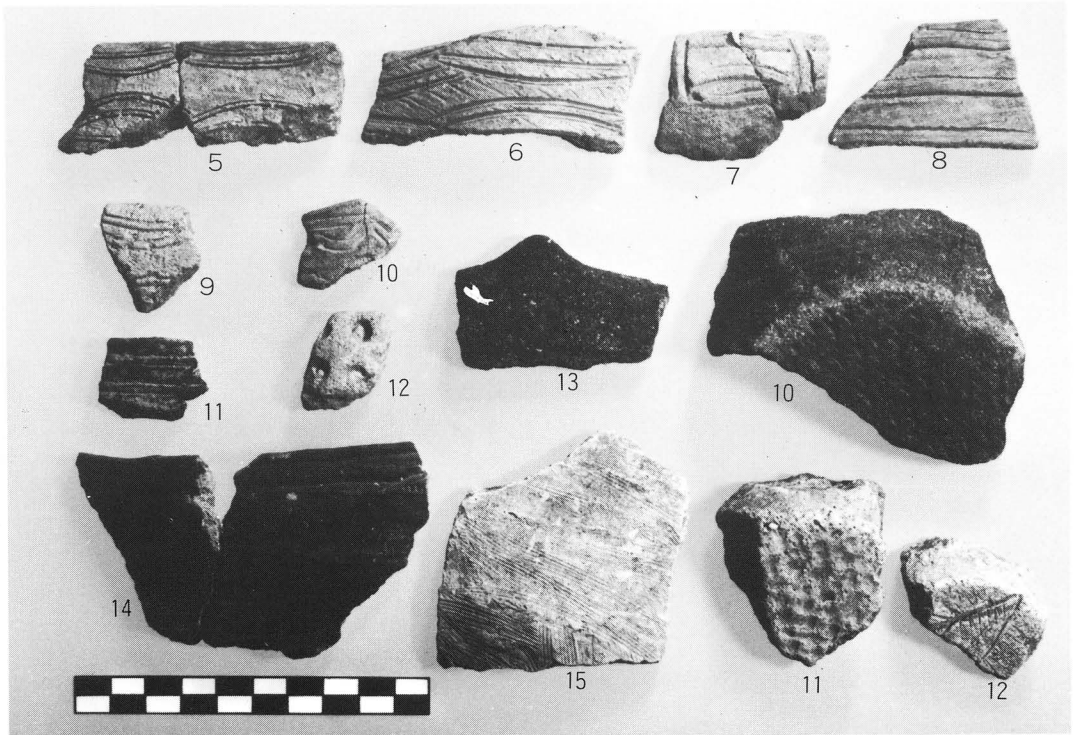


縄文前期・中期の土器 (図33)



縄文後期の土器 (図33-18~27・図34-1~4)

図版13 高ノ御前遺跡第3地点・土器2



縄文晩期の土器 (図34-5~15・図35-10~12)



縄文晩期の土器 (図34-16~24・図35-1~9)

図版14 高ノ御前遺跡第3地点・土器3

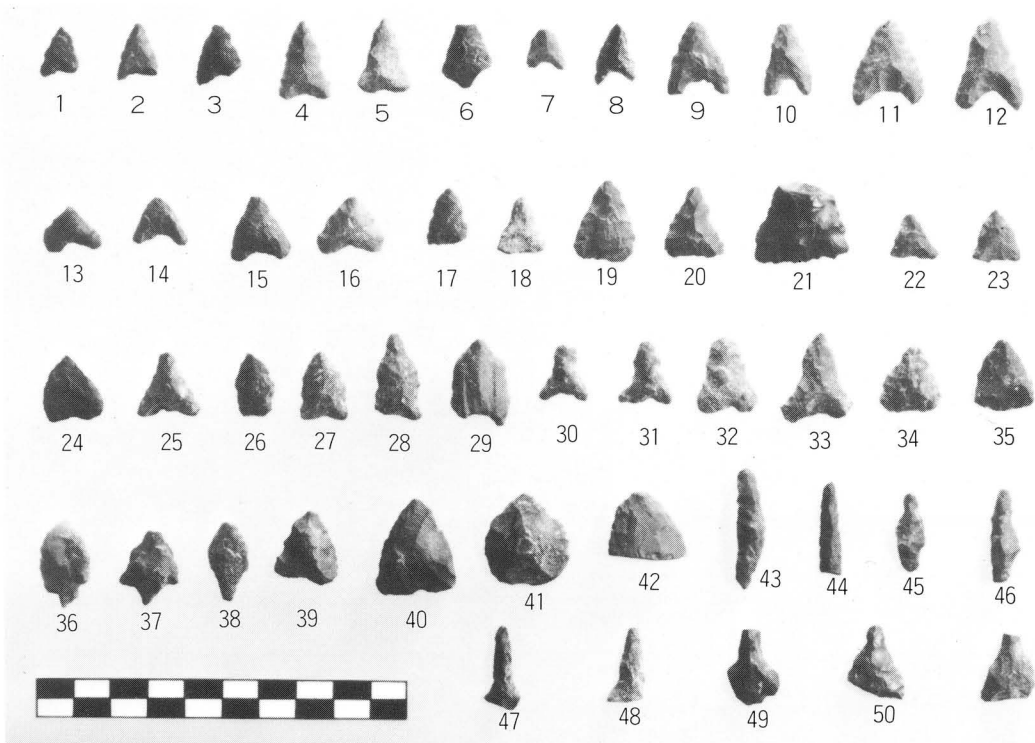


条痕文系土器 (図35)



弥生土器 (図36)

図版15 高ノ御前遺跡第3地点・石器

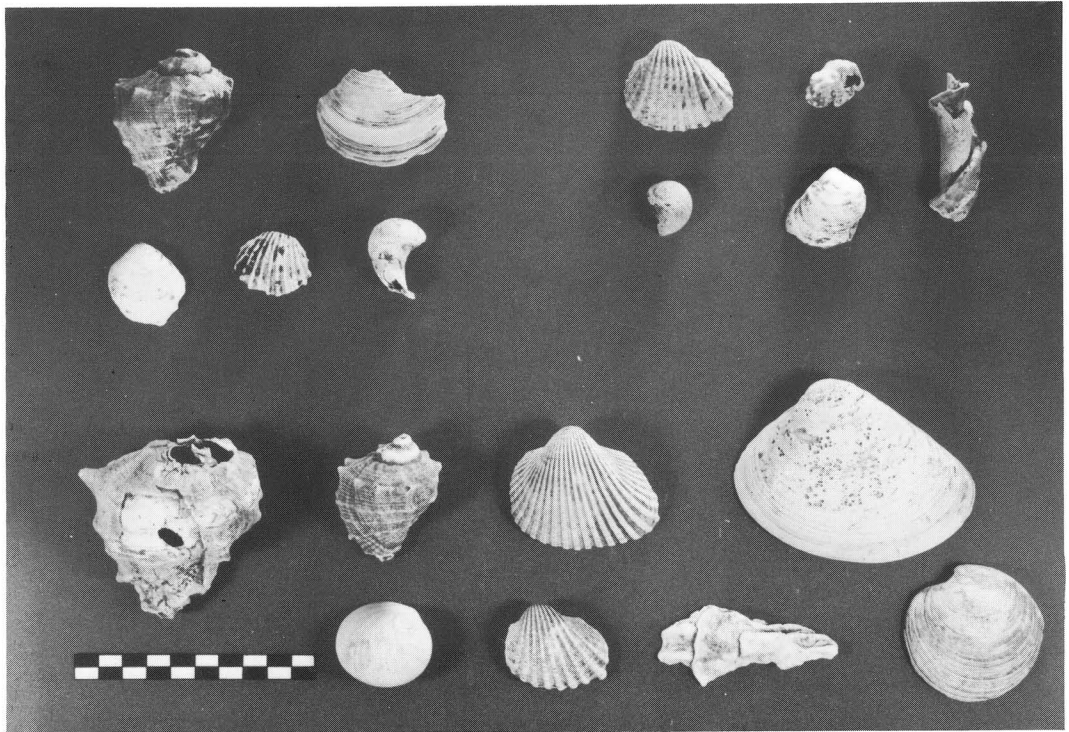


石鏃等 (図37)



石器等 (図37-51~53・図38-1~6)

図版16 高ノ御前遺跡 第3地点・自然遺物



貝類 (右上Aトレンチ貝層・左上BトレンチP₁貝層・下半表採)

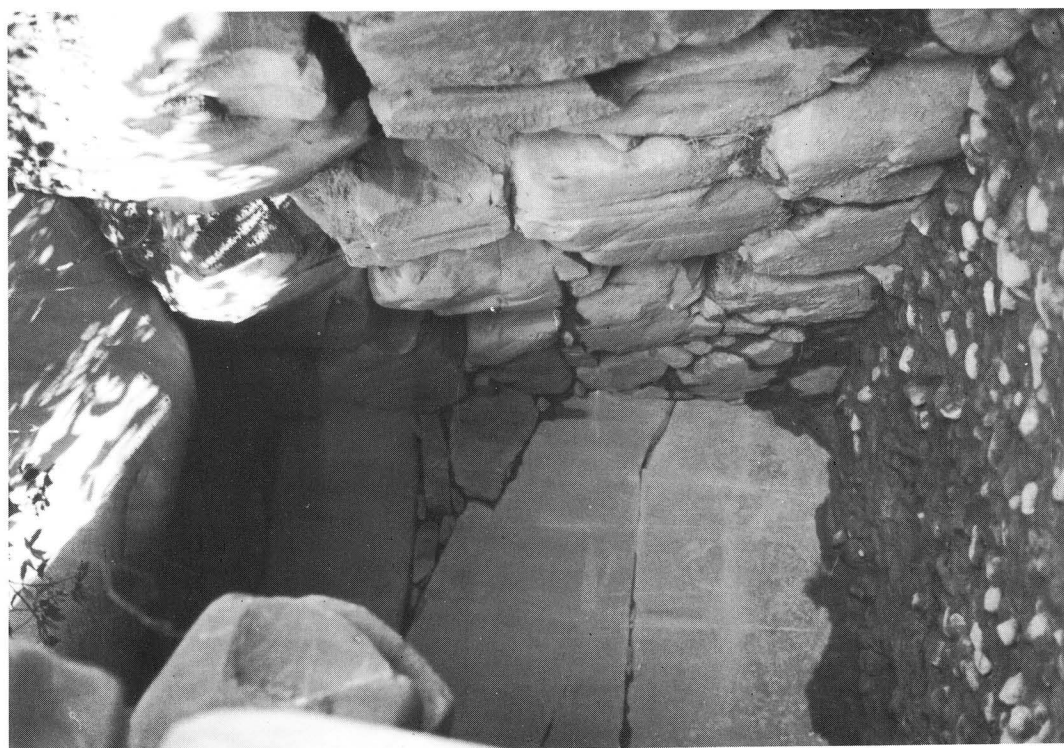


獣骨・魚骨類 (右端中央1点表採、その他A区貝層)

図版17 岩屋口古墳石室



岩屋口古墳石室



岩屋口古墳石室・側壁

図版18 岩屋口古墳出土遺物等

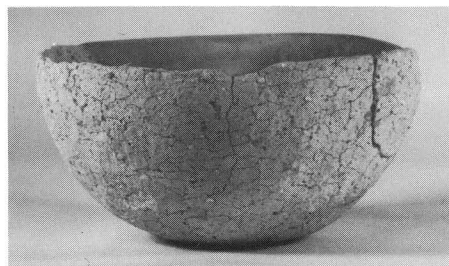


岩屋口古墳開口部から中ノ池を望む

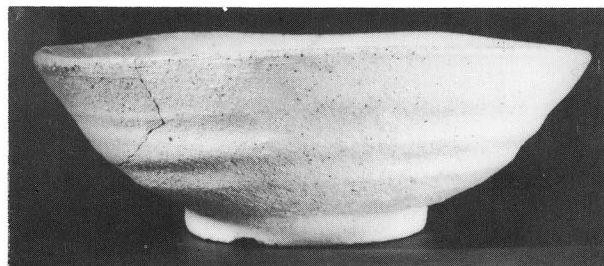


9

2



1



10

出土遺物（図41）

図版19 岩屋口古墳出土遺物



須恵器 (図41)



鉄製品 (図42)

昭和57年3月10日 印刷

昭和57年3月15日 発行

愛知県東海市中ノ池遺跡群
発掘調査報告書

編集発行 〒476

愛知県東海市中央町一丁目1番地

愛知県東海市教育委員会

電話 <0560> 63-2211(代)

<0562> 33-1111(代)

印刷所 愛知県東海市荒尾町上畑16-2

東海企画

